

# 日印文化

インド共和国独立50周年  
関西日印文化協会 創立40周年記念特集号



KJICS

関西日印文化協会  
KANSAI JAPAN-INDIA CULTURAL SOCIETY  
कान्साई जापान-भारत सांस्कृतिक संघ

日本を代表する世界のカード



# SAKURA CARD

さくらカード株式会社

本社/〒103-8555 東京都中央区日本橋堀留町一丁目8番12号 TEL (03) 3663-3331  
関西本社/〒650-0001 神戸市中央区加納町4丁目3番3号 TEL (078) 331-3451

おかげさまで30周年

コンピュータの



株式  
会社

## さくらケーシーエス

本社 〒650-0036 神戸市中央区播磨町21-1 ☎ (078) 391-6571  
インターネットサービス <http://www.sakura-utopia.ne.jp> さくらケーシーエスホームページ <http://www.sakura-utopia.ne.jp>

不動産の売買、賃貸借の情報は、ぜひ当社へ  
ご一報願います。

## 京阪神興業株式会社

本社 神戸市中央区浪花町15番地  
電話078(321)4311 FAX078(321)4315

東京・大阪・姫路・小倉

## 神戸土地建物株式会社

### 主要業務

- ビル事業部門・さくら銀行をキーテナントとするオフィスビル・一般オフィスビルの賃貸
- 設計監理受託、不動産売買仲介・一般建築事務所・宅地建物取引業登録
- 商事部門・さくら銀行のネットワークを通じる物品の販売、各種サービス業務の取次  
斡旋と代理業務

本社：神戸市中央区浪花町15番地  
電話 078(391)7311 FAX 078(391)2341

支社：神戸・大阪・名古屋・東京

## ご　あ　い　さ　つ

関西日印文化協会

会長 桑原 泰業

古来インドは、仏教文化（仏教芸術）を通じて日本と因縁の浅からぬ国であります。そして現在も、両国は政治的にも経済的にも極めて密接な関係にあります。

戦後の日印関係で見落せないものに、極東軍事裁判におけるインドのパール判事の日本無罪論、サンフランシスコの条約に加盟せず、独自に日本との平和条約を締結したインドの対日外交があげられます。また昭和天皇崩御に際して、インドが国を挙げて3日間の喪に服してくれたことも忘れられません。このようにインドは戦後は一貫して日本の立場を支援してきた親日国家であります。関西日印文化協会は、1956年に日印文化協定が締結され翌年に故ネルー首相が来日されたのを記念して、1958年に設立されたインド政府公認の団体であります。世紀末を迎える、日印両国はそれぞれ固有の課題を抱えておりますが、われわれは過去の歴史の積み上げを貴重な共有財産として、叡智をもって新しい世紀を迎えることを存じます。

時あたかも、一昨年はインド共和国独立50周年、関西日印文化協会創立40周年を記念して多彩な記念行事を展開いたしました。その際の一連の行事の総仕上げとして、協会の諸先生方に記念論文の執筆をお願い申しあげ、このほど記念論文集を刊行する運びになりました。本誌刊行に際し、お祝辞を頂戴いたしました駐日インド大使シッダルタ・シン閣下に厚く御礼申しあげます。また、玉稿をお寄せいただきました諸先生ならびに編集の労を煩わせました神戸松蔭女子学院大学教授・同学院院長の黒澤一晃先生に感謝の意を表したいと存じます。

最後に、当協会の創立40周年を契機に皆様方の一層のご協力、ご鞭撻の程をお願い申しあげる次第でございます。



AMBASSADOR



भारत का राजदूतावास, टोक्यो

Embassy of India  
2-11, Kudan-Minami 2-chome  
Chiyoda-ku, TOKYO 102

Phone : (03) 3265-5036  
Fax : (03) 3262-2301

27 January 1999

### MESSAGE

Over the past 40 years, the Kansai Japan-India Cultural Society has been actively engaged in promoting understanding, friendship and cooperation between India and the Kansai region of Japan. For this purpose it has taken the initiative to organise discussions on political, economic and social issues as well as arranged cultural programmes. It played an active role in support of the Festival of India in Japan in 1988 and made a valuable contribution to the successful celebration of the 50th Anniversary of India's Independence.

2. I would like to congratulate the Kansai Japan-India Cultural Society on its 40 anniversary and for the publication of a special memorial issue of 'Nichi-In Bunka'. I wish the Society continued success in its sincere efforts to enhance cultural cooperation between India and Japan.

(Siddharth Singh)



祝　　香辛

シッダルタ・シン  
(駐日インド大使)

貴関西日印文化協会は、過去40年間にわたり、わが印度連邦共和国と日本、とくに関西を中心とする日本との間の、相互理解・友好関係・相互協力のために献身的な活躍を続けてこられました。上記の目的の達成のために、貴協会は、各種の文化行事を開催されるとともに、政治・経済・社会の諸問題に関する討議の場を組織されるなど、積極的に両国の友好関係の増進に努めてこられました。貴協会はまた、1988年の「日本における印度フェスティヴァル」に全面的な協力を惜しまれず、また日本における「インド独立50周年記念祭典」を成功裡に導く上で大きな役割を果たされました。

2. 私は、貴関西日印文化協会がこのたびその発足40周年を迎えたことに対し心からの敬意を表するとともに、これを記念する『日印文化』記念号をご発刊されることに心からの祝意を表するものであります。ここに、私は、日印両国の文化的な絆を高めんとされる貴協会の真摯なるご尽力によって、両国の友好関係がますます増進されることを祈念して、お祝いの言葉とさせていただきたく存じます。

シッダルタ・シン  
(署名)



## インドの二人の偉人

桑原 泰業

(関西日印文化協会会長)

史上、インドは仏教文化を通じて日本と因縁浅からぬ国であるが、戦後は一貫して日本の立場を支援してきた親日国家である。関西日印文化協会は、1956年に日印文化協定が締結され、翌年に故ネルー首相が来日したのを記念して、1958年に設立されたインド政府公認団体である。時あたかも、本年はインド共和国独立50周年、関西日印文化協会創立40周年の記念すべき年である。

同協会会長として、私はインドについて多くのことを学んできたが、なかでも今回は、近代以降の日本と関係の深い2人のインド人の「平和への願い」について述べてみたい。

最初の一人は、詩人タゴール（1861～1941）である。彼はベンガルの大地主の家に生まれ、40歳のとき、父の宗教実践の地シャンティニケタンに小さな学園「平和学園」を設立する。自然のなかで全人教育に努めつつ、詩作に専念した。1913年には、詩集『ギタンジャリ』で、アジア人として初のノーベル文学賞を受賞する。インドの大地と人間とを讃えた彼の詩が、のちに独立インドと国歌となる。

日本でもそれから2年後の1915年には、1年間で『ギタンジャリ』など計10冊もの翻訳が出版された。しかしタゴールは、日本では今日にいたるまでもっぱら詩人として受容され、他の側面である人間尊重と人類結合の理想、またその実現に向けての世界平和へのたゆみない実践活動についてはあまり知られていない。

タゴールは生涯に3度、日本を訪れている。詩人はノーベル賞を受賞したころから、「世界市民」としての自覚と使命感を一層強め、東西文化の相互理解と世界平和の実現を目指して、その晩年の20年余を文字通り老軀に鞭打って東奔西走した。その世界巡礼の旅は、第一次大戦たけなわの1916年に、日本とアメリカを振り出しに始めたのである。

ヨーロッパが殺戮の血祭りに熱狂しているときに、世界の独立国民のなかで、彼の人類愛のメッセージに耳を傾け、平和への努力に力を貸してくれるのは日米両国だと

詩人は確信していた。ところが、その確信は見事に裏切られた。タゴールの人間主義は、国威宣揚を旗印に掲げていた当時の日本の全体主義と真っ向から対立するものだったからである。残念ながら、彼の考え方はそのような日本で受け入れられるはずもなかった。しかし、それでもなお日本の軍国主義を痛烈に批判し続けたタゴールの姿勢は、透徹した「平和への願い」に支えられていたのではないだろうか。

パール判事（1886～1967）もそのような願いを貫いた人であった。彼は極東国際軍事裁判（東京裁判）を裁いた11人の判事のうちの一人である。ちなみに、同裁判はニューヨークにおけるドイツに対する軍事裁判に倣ったもので、国際法や条約などに基づくものではなかった。訴追された被告は28人。判決を受けたのは病死・入院した3人を除く25人で、全員有罪となり、うち7人は死刑を宣告された。

この裁判は日本を敵とした国々の代表によって行われたもので、各国の利害が絡み合っていた。そのなかでパール判事は、法の精神にのっとり、堂々と全員の無罪を勧告した。

判事は「戦争は、暴力と暴力の戦いである。その暴力の戦いに勝った暴力者が、敗れた者を裁くとは何事か。そのような裁判を行う理由がどこにあるか」との観点から、その理論を展開した。また注目すべきことに、戦勝国の大統領が原子爆弾の使用を決定したことを、第一次大戦でのドイツ皇帝の敵国民全殺戮指令や、ナチスの指導者の虐殺命令にも匹敵するとまで指摘したのである。

そしてパール判事は、「法のないところに刑罰はなく、法のないところに裁判はない」という法律家としての考え方を立ち、次のような結論を出したのである。「戦争は犯罪である、という法律は遺憾ながら、現行国際法のどこにもない。したがって、本裁判の被告も全員無罪である」と。

この判事の結論の背景にも、戦争という暴力こそが絶対悪なのだという、確固たる信念があったように思われる。この信念もまた、詩人タゴールと同様の平和主義に支えられたものであったに相違ない。言い換えれば、タゴールは日本の暴力を批判したが、パール判事は、日本に対しての暴力を世界が正当化することに異議を唱えたのである。繰り返しになるが、同じ「平和への願い」によって。

私たちは、この意義ある年にあたって、2人のインドの偉人の「平和への願い」をあらためて正しく受け止める必要があるよう思う。



## 不滅の為政者 アショーカ大王を偲ぶ

森 修爾  
(聖徳太子会理事長)

1947年8月15日、インドは2世紀近くに涉ったイギリスの殖民地の時代を終え、完全独立を果たしてより50年余の歳月が流れた。これは偏えに、ガンディーの非暴力主義に依る指導の賜に違いないが、しかしながらそれはインド民衆の奥底に横たわる伝統精神から出したものであることが思われ、それはまた不世出の大王と称せられたアショーカの精神に由来するとも考えられます。インド独立50周年を記念する本紙上に、このアショーカ大王のことを些か述べさせて頂こうと思う。

アショーカ大王は、紀元前4世紀ごろ設立されたマオリア王朝第3世の王として即位したが、若かりし頃はチャンダーアショーカと呼ばれた暴虐な人であったという。然し、即位8年、インド南東部の国であるカリンガを征討以来、ダルマアショーカと呼ばれるほどの王に転向したという。このことの記録が「摩崖の法勅」として刻まれている。

灌頂8年カリンガが征服された。15万の人々がそこから移送され、10万の人々がそこで殺害され、また幾倍かの人々が死亡した。それ以来、カリンガが征服された今、アショーカの熱心な法の実修、法に対する愛慕および法の教説が行なわれた。これはアショーカの悔恨である。なぜなれば、征服されたことのない国が征服されれば、そこに人民の殺害、または死亡、または移送があり、これはアショーカにとってひどく苦痛と感じられ、悲痛と思われるからである。・・・

かくて、深い悔恨の思いから彼は、釈尊の遺法を伝えるサンガの人となって、2年半学び、深い帰依の人となった。爾來この仏法の精神を基調とする法に基づいた治政を行ない、再び武力に依る領土の拡大を行なわず、人間はもとより、すべて生命あるものを慈しむ治政を行なっていった。彼の法の概念は広く、それは釈尊のダルマの精

神が深く浸透したことの表れであり、それがまた仏法の心が生命の根元の流れであることの証左でもあろう。

アショーカ王の治政の版図は非常に広大であった。それ故に、王の考えを知らせるために、重要な地点を選んで岩山の崖や大岩石を削って、そこに彼の詔勅等の文字を彫りつけさせた。それが今も多く遺っており、それに依って彼の願いや思いを知ることができるのである。

われわれは人々の信頼を得なければならぬ。すべての人々の私の子である。

と彫りつけ、（つづけて）

従って私がどのような努力をなそうとも、それは有情に背負っている債務を履行するためであり、彼等を現世において安泰ならしめ、また来世においても天に達せしめるためである、と。

アショーカの治政は有情即ち生命あるものに負う債務の履行という表現をし、更には現世のみか来世にまで安泰を与えねばならぬとの表現はまことに驚きである。また有情の殺害を強く諒めており、今日インドにはこの不殺生の思想が強く流れている。

こうした考えを達成するために人民の適切な取扱いはもとより、主要な道路に街路樹を植え暑熱のインドの大地を行く人々のために陰を与え、適當な距離に井泉を掘って休息所を設け、人と動物のために水飲み場を作らせた。しかも、处处に人と家畜のために2種の療院を建て、薬草を栽培させたのであった。このように紀元前の時代において、我々の想像を絶する事業を行なっているのである。

この時代は、もちろん仏教が中心ではあったが、他にバラモン、アージービカ、ニガンダ、ジャイナ等の宗教があった。王は法大官を任命して巡回せしめ、各宗派が他を誹謗中傷することを厳しく諒め、互いに和するよう導いたのであった。然し、これに背いて教団の秩序を紊すものに就いては、例えば仏教においては「破僧伽罪」として破門追放せしめた。こうして正しい宗教を監視すると共に、手厚い保護をして眞実の帰依に於いて法の目覚めを促したのであった。

私はこの2月、第6回目のスリランカの仏跡巡りをして参りましたが、緑美しいこの国は、南伝仏教伝統の国であります。

ご承知のように、アショーカ王は仏教の使節を四方の国々に派遣して、ダルマの精神普及に努めました。この南の島国スリランカへは、王の息子で仏門の人となったマヒンダ比丘を派遣しました。比丘はランカの王ティッサを説得し正式に仏教を伝えま

した。更にアショーカ王は、娘のサンガミッタをして、インドの釈尊正覚の地ブッダガヤの大菩提樹の小枝を株分けしてランカに運ばしめ、それがこの国の仏教のシンボルとして2千余年の長きに涉り大切に保護されています。しかし、この国も様々な盛衰の歴史を繰り返し、16世紀にはポルトガルが侵入、続いてオランダ、さらにはイギリスに征服され、その殖民地となり、独立して50年余の歳月が経ちました。インドと同じく親日の国であります。

この国に来て思い起こすのは、今は逝きこの國の大統領ジャヤワルネデ氏のことである。「私は人類史の上で最も尊敬する方が二人ある。その一人はインドのアショーカ大王であり、もう一人が日本の聖徳太子である」と語られたのは有名である。先年この方の顕彰碑が鎌倉の寺院に建立された。

聖徳太子のことは既にご承知と思いますが、太子もアショーカ王と同じく仏教の精神に基づいて国を治められました。当時は、朝鮮半島との間に武力闘争が繰り返されていましたが、聖徳太子はその武力行使を全く破棄して、アショーカ大王と同じく、法の精神に依って国を治められました。有名な「十七条憲法」には、太子の精神がはっきりと打ち出されていますが、それを貫くものは、「和」の精神の実現がありました。これは、日本ばかりでなく、世界何れの国においても最も大切なことであり、そのためには「法」の導きに依って真実の帰依の心が確立されねばならぬと教えられ、憲法第2条には「四生の終帰、万国の極宗」と銘記されました。そして、国民の眞の幸福実現のために、政治に携わるものは、克苦勉励すべきであると懇々と諭されました。

私どもは、いま不世出と云われるアショーカ大王を偲ぶにあたり、時代や場所は遠く隔たっていても、日本の聖徳太子が相通ずる方であることを思い、日本国民として深い感銘の湧き出るのを覚えるのであります。



## アーユルヴェーダ探訪 <ヨーガとの関係>

山口 恵照

(大阪大学名誉教授)

筆者は昨年12月、アーユルヴェーダ研究会の呼びかけに応じて、南インドのバンガロールを振り出しに、カルナータカ、ケーララ、タミールナドの諸州を遍歴する旅行をこころみた。この旅行は南インドのアーユルヴェーダの現状に触れて、アーユルヴェーダを探訪するもので、アーユルヴェーダ研究会から多数の参加者があろうかと思われたが、実際は筆者を含めて4人であった。けれども、斡旋した旅行者のはからいで、参加者全員の世話役である添乗員と通訳兼ガイド、ならびにアーユルヴェーダのヴァイディヤ（専門医）であるH. Sh. シャルマ博士（グジャラート大学名誉教授）の同行・指導を得て、筆者には有意義であった。

アーユルヴェーダというのは、ご存知の方もあろうが、古来、インドにおいて行なわれてきた伝統的医学・医療の体系である。それは近・現代、日本に伝えられ広く行なわれてきた西洋の伝統的医学・医療とは異なっているが、基本構想において特徴を発揮し、小児科等の8分科を伝え、広くインドの民衆の健康の保持、病気の治療に役立っている。わが国においては、残念ながら、あまり知られていない。けれども、近來、注目されつつあるヨーガとも深い関係にあり、ヨーガの坐法（アーサナ）・呼吸法（プラーナーヤーマ）の大切な前提として「食事」をとり上げて評価している。この点はヨーガを全体として見通す上にも重要な問題を提起していると思う。

ハタ・ヨーガ（力用のヨーガ）では、節食、禁忌の食物、修行者に適する食物について説くが<sup>(1)</sup>、これはアーユルヴェーダにおいてより詳細であり、アーユルヴェーダを背景として体系的に位置づけて見ることができる。アーユルヴェーダにいう、

食物はすべての生物の生命であり、生物はみな食物を求める。容色、器官の清浄、美、長寿、幸福、思慮、等は食物による。<sup>(2)</sup>

生物の生命を維持する食物は、ヨーガの修行に従事する修行者にとって大切なことは言うまでもなかろう。それは単に健康を保持・増進するためではなくて、修行を全うするか（糧）となる。この点で、アーユルヴェーダの基本構想における「トリ・

ドーシャ（生存の3因子）」と「サプタ・ダートゥ（人体を形成する7単位）」は注目に値するのである。

トリ・ドーシャとは、人間と人間が生存する環境を構成する共通の基本因子で、ヴァータ（風・動性）・ピッタ（熱・煥性）・カバ（痰・粘性）と名づける。人間の生存はこれによって維持されるのである。この場合、3因子は人体においてそれぞれ、臍より下、臍より上・心臓より下、心臓より上、を主要な機能場所とするが、生存の安泰（健康）は3因子のバランス（平衡）において確保されるから、人間は人体の各部位（7単位）のすべてにおいて、3因子のバランスのある新陳代謝を維持するように工夫しなければならない。このためアーユルヴェーダは、トリ・ドーシャとともにサプタ・ダートゥ（7単位）を説くのである。

サプタ・ダートゥというのは、①ラサ（食精、飲食物の精分）、②ラクタ（血液）、③マーンサ（筋肉）、④メーダ（脂肪）、⑤アスティ（骨格）、⑥マッジャン（骨髄）、⑦シュクラ（白色、生殖液）という、人体を形成する7単位であり、人間はこの7単位のすべてにわたって、トリ・ドーシャのバランスを保つ新陳代謝を維持するとき、生存の安泰（健康・無病）を期することができる。ラサからシュ克拉にいたる7単位（7部位）のいずれかにおいて、トリ・ドーシャのバランスが失われると、新陳代謝は損なわれて生存の安泰を期することができない。

このことに関して、実は、シュ克拉を中心として留意すべきことがある。7単位（サプタ・ダートゥ）の中の⑦シュ克拉は、次世代を生み出す白色の精液であるが、次世代を創生する生殖素として重視すべきものであって、単に精力旺盛の象徴と解するのみでは不十分である。もし精力旺盛の象徴と解し、これに留まる<sup>(3)</sup> ようであれば、却って大切な修行の障害ともなるのである。

これは、不殺生（アヒンサー——非暴力）等のヤマ（禁戒）、身心の浄化（シャウチャ）等のニヤマ（勸戒）を修める修行者が、安定し安楽な坐法（アーサナ）・長く微かな呼吸法<sup>(4)</sup>（プラーナーヤーマ）においてまさしく気付かねばならない点である。このため、ヨーガでは前記のごとくアーユルヴェーダに同調して、食事の精撰に関してなかなかきびしいものがある。

修行者（ヨーギー）はもちろん、よりよく生きようとする者すべてにとって、まさしく自戒すべき点だと思う。

注

- (1) 『ハタ・ヨーガ・プラディーピカ』 1, 31; 58~63. 『ゲーランダ・サンヒター』 5, 16~30.
- (2) 『チャラカ・サンヒター』 第1巻・第17章 参照。
- (3) 仏陀はこの点をいましめて、「八苦」の中に「五蘊盛苦」と示したもう。生老病死の四苦に加えて、愛別離、怨憎会、求不得、五蘊盛の四苦を挙げて八苦とするのは周知のごとくであるが、若年の血氣盛んであることは、往々、少年・青年・壮年の驕り勝ちの事態を招来し、あるいは愛しい者と別離し、あるいは怨み憎むものと一緒にあらねばならない、また所望のものが得られない、というもろもろの苦悩をひき起こすのである。
- (4) 『ヨーガ・ストラ』 2, 46~53.

〔付〕このたびの南インド遍歴の旅については、さらに別稿を期したいと思う。



## 父が子に語る世界歴史

池上 徹

(弁護士)

昨年、日印協会の桑原会長から送っていただいたパール博士の資料のなかに、偶然、インドのネルー初代首相がその娘インディラさんと来日されたときの写真を見つけた。ネルーが獄中からせっせと世界歴史を書き送ったのはこの娘にだったのか、と感慨をもってながめた。ネルーは、ガンディとともに統一インドの実現を念願する独立運動を指導し、何度も投獄されたが、その機会にインディラ嬢に手紙を書いて世界史の教育を施した。

その手紙が何冊にもおよぶ本となって戦後出版され、昭和30年ごろには日本でも翻訳され出版されていたのである。題名は『父が子に語る世界歴史』。テーマごとにまとまっていて、面白い。そして何よりも記述が公平で説得力があった。当時私は高一で、世界史の教師の平板な授業に辟易していたので、授業時間中、このシリーズを持ち込んで、そればかり読んでいたところ、教師に気づかれて表紙をめくって確認された思い出がある。ちなみに、この教師は、だまって私の席からはなれ、何もいわれなかったが、2～3年後に転職してしまわれた。

ネルーがインディラ嬢に注いだ歴史教育への情熱は、全人類的なレヴェルにおいて公平な歴史観を伝えることにあり、しかも成功であったにちがいない。インディラ嬢、後のインディラ・ガンジー女史は、ネルーが首相を辞して2年後の1966年にインド首相に就任し、その後起伏があったが1984年に暗殺されるまで、終始インドの指導者であった。いまから思えば、獄中でも資料の入手が許されたのかもしれないが、当時の私には、獄中から子に語りかける内容が、あまりにも深い知識と教養に裏付けられていることに驚嘆した。ネルーは第2次大戦中、日本の軍国主義やナチズムと結んでまでは独立を求めるという国民会議派のリーダーであった。ネルーの対応は、当時の熱血の愛国者スバース・チャンドラー・ボースらが、早期独立のためには進んで日本と手を結んだことと対比される。心情論とは別に静かに考えれば、そこにネルーの歴史証人としてのたしかな洞察力を感ぜざるを得ない。後にパール判事の判決文

を読むに及んで、世界史を真に客観視できる教養人がほかならぬインドで生まれることに改めて感銘した記憶がある。インド憲法は、すでにカーストによる差別の禁止を明確に定め、不可触民制廃止を決めている。この措置が実際に浸透し、経済、教育面での進展が伴うとき、インドの将来には見るべきものがあろう。

ところで、デリーには、ネルーのフルネームを冠したジャワハルラル・ネール大学があり、この大学の大きな特徴は、キャンパスでは男女の学生が自由に交際できることである。このことが、他のインド社会に抜きんでた先進性と評されるには驚かされるが、ネルーの名を冠することで男女交際の可能な大学が生まれたことに興味を覚える。ちなみに、ネルー大学の学風は、カーストや宗教をこえ文化と価値観を克服するすぐれた交流の場を形成しており、いまや同大学はインドの大学できわめて重きをなしているとのことである。

さて、過ぐる大東亜戦争の評価について、わが国では、ネルーやパールのような多角的な観点からの歴史的評価の取組みがなされているといえるであろうか。東京裁判においてみられるような、かたよった史觀に立つことなく、複眼的な、構成な視座から、『父が子に語る世界史』のたぐいの史書が、もっとあらわれなければ、と思うものである。



## ヒンドゥー教の聖牛崇拜

森本 達雄

(名城大学教授)

ヒンドゥーが牛、とくに牝牛を崇敬していることは周知のとおりであるが、その歴史はかなり古いようである。その起源は、そこに生きる人間の暮らしに密着した実用的な価値観に発し、神話や迷信や信仰はあとから加えられたものである。インダス文明でも牝牛崇拜がなされていたらしい痕跡は、発掘された印章の図柄やテラコッタ（とくに生命感にみちた有名な「瘤牛」像は、この文明の生んだ芸術品の傑作である）などから想像されるが、テーマとしては他にも象や虎・犀・鹿などがあり、後代のように牛だけがとくに神聖視されていたかどうかは定かではない。

牡牛は遊牧の民アーリヤ人にとっては移動・運搬の強力な手段であり、定住後は農耕にかかせぬ労働力であった。また牝牛は、乳やバター、ヨーグルトといった貴重な蛋白の供給源であり、牛糞は燃料や厩肥（きゅうひ）として重宝された。これらに淨めの尿を加えた5つを、「パンチャガヴヤ（牝牛の5つの産出物、すなわち五宝）」という。今日でも、インドを旅するだれもが興味をひかれるのは、牛糞燃料である。暇さえあれば、家の女や子供たちは竹籠を頭に道端や野原に出かけて牛糞を拾い集め——動物の糞を頭にのせるなどもってのほかと怒らないでいただきたい。この国では牛糞は神聖なのである——それを丸く平らなホットケーキ型にこねあげ、家の土壁に貼りつける。このとき、所有者の目じるしに手形を押しておく。農家の外壁に貼りつけられたこの丸い牛糞のパッチワークは、インドの農村のシンボルマークと言えるかもしれない。乾燥した牛糞燃料は、炭や炭団（たん）のように竈（かまど）にくべられるが、燃えやすく、火力があり、余熱もあって使い勝手はよいという話である。夕暮れどき、土作りの家々から特有の匂いを放ちながら立ちのぼる薄青色の牧歌的な煙は、なんとも風情のある光景である。牛糞はまた、農家の壁や土間に泥と混せて使用され、竈の周辺はとりわけていねいに塗り込められる。これには、消毒やコブラ・サソリ・毒虫などの防除の効果もあるようである。このほか牛の糞や尿は、宗教的な淨めの手段として、ヒンドゥーの生活にはかかせない。カーストの掟に違反したり、穢れた者（

ヒンドゥーの穢れの基準はいろいろ複雑であるが）は、牛の糞を顔や体に塗り、尿を飲んで淨めの儀式をおこなう。

こうして牛は、アーリヤ人にとっては貴重な財産であり、その実用的価値がやがて牛の神聖視へと発展していったことは納得できる。しかし、ヴェーダ時代には、牛もまた重要な犠牲獣の一つとして、祭祀には神々にささげられていた（ただし、乳を出す牝牛を除く）ことや、インドラ神がことのほか牛の犠牲を好んだことなどが、『アイタレーヤ・ブラーフマナ（祭儀書）』に記されている。このことは当然、犠牲獣の肉が儀式を司ったバラモンや施主たちの口に入っていたことになり、今日のような牛肉のダブーはまだ存在していなかったことになる。古代アーリヤ人のあいだで、牛がどのように尊重されていたかについて、『古代インドの文明と社会』の著者＝山崎元一氏は、つぎのように興味深い解説を記しておられる――

----当時のアーリヤ人の最も重要な財産は牛であったため、戦闘はしばしば牛の略奪（りゃくだつ）や牧草地の獲得を目的としてなされている。こうした牛と戦闘との関係は、「牛を欲すること」を意味するガヴィシュティという語が「襲撃」、「戦闘」を、「牛を勝ち取った者」を意味するゴージットという語が「英雄」を、「牛を守る者」を意味するゴーパという語が「首長」をそれぞれ意味することからもわかる。

これはまさに、ことばはその時代、その社会状況を反映する文化遺産だといわれる一つのよい実例であろう。アーリヤ文化は、牛文化であったと言っても過言ではない。アーリヤ人がいかに牛をいつくしみ、愛し、共生してきたかは、牛にかんするサンスクリット語の語彙（ごい）の豊富さを見れば一目瞭然である。ことえば、生まれてまだ草を食めない幼牛アトリナーダに始まり、ヴァトサ（仔牛）、プラーサンギャ（首から軛を吊して放牧される仔牛）、ディティヤヴァー（二歳牛）、ドヴィダン（一組みの永久歯が生えた2～3歳の牛）、チャトゥルダン（二組みの永久歯をもつ三歳牛）、ウパサラ（最初の交尾をした牡牛）、スター（不妊の、または子を孕んでいない牝牛）、グリシュティー（いちど子を産んだ牝牛）、バシュカヤニー（子牛を連れた牝牛）等々、年齢や成長段階とともに変化するさまざまな呼称は、おそらく飼育の必要から生じた長年の観察と知識の賜物（たまもの）であろう。一つの動物について、これほど多くの語彙をもった民族は他にないのではないか。

叙事詩『ラーマーヤナ』に登場する牝牛「カーマ・デーヌ（如意牛）」の話は、ヒ

ンドゥーなら知らぬ者はあるまい。カーマ・デーヌは、聖仙ヴァシシュタに飼われる牝牛で、すべての望みをたちどころにかなえる不思議な力をもっていた。これを知ったヴィシュヴァーミトラ王は、なんとしても彼女を手に入れようと、百万頭の牛、いや王国と交換してもよいと、ヴァシシュタに譲渡を願い出たが、聖仙は神々に供物をささげる必要からこれをことわった。そこでこんどは、武力をもって奪おうとしたが、怒ったカーマ・デーヌに大軍を滅ぼされてしまった。これを見て、ヴィシュヴァーミトラ王は悟るところがあり、王国と富をすべて、ヒマラヤ山中にこもって苦行をつみ、ついにバラモンの位に到達したという。作者の意図するところは、おそらくバラモンの法力はクシャトリヤの武力にまさることを教示するものであったろうと思われるが、民衆のあいだで、人びとの願いをかなえてくれる豊饒の牝牛に称讃が集まつたのは、むしろ自然であった。信仰の原点は、古来民族を問わず、祈願であり、その成就であったからである。

こうしてプラーナ時代の神話や物語によって、牛はしだいに神格化されていった。たとえばカーマ・デーヌは、最高神プラフマーの息子ダクシャの娘とされたり、ヒンドゥーの創造神話として知られる「乳海攪拌」のときに乳海から現われた「十四の貴宝（チャトゥルダシャ・ラトナム）」の一つとされるといったぐあいである。またシヴァ神の乗り物（ヴァーハナ）である牡牛ナンディンは、シヴァ・リンガとともにシヴァ神の象徴として祀られ、シヴァ寺院や街角で見かけるナンディンの座像は、今日も人びとの篤い信仰を集めている。（ちなみにこれと関連して、『インド神話入門』の著者＝長谷川明氏は、日本の天神様の乗り物も牛であることをあげ、菅原道真公の神としての名が天満大自在天であり、自在天とは漢訳仏典ではシヴァ神のことであることから、両者のあいだの類似は偶然とは言えない、との興味深い指摘をしている）。

こうした歴史的経過のなかで、ヒンドゥーの聖牛崇拜をひろく大衆のあいだに普及・定着させたのは、なんといってもクリシュナ信仰であろう。クリシュナは、シヴァ神と並ぶヒンドゥー教最高神の一つであるヴィシュヌの化身（アヴァターラ）として早くから崇拜されていたが、大叙事詩『マハーバーラタ』の一部（七百頌）が『バガヴァッド・ギーター（神の歌）』という独立した聖典となり、ヒンドゥーのあいだでひろく愛誦されるようになったとき、英雄神クリシュナの人気はにわかに高まった。

『バガヴァッド・ギーター』は、バーラタ族が二分して戦った大戦争を前にして、戦場に臨んでなお同族間の殺戮に苦悩し逡巡する勇者アルジュナ王子を、彼の御者（ぎよ

い) として登場したクリシュナ（すなわちヴィシュヌ神）が激励し、人間の義務の私心なき遂行と、最高神への絶対的帰依をじゅんじゅんと説いた物語である。言わばそれは、決戦場という極限状況において人間の採るべき道を教えた神のことばであり、今日も信者の胸にひびくものがある。

このようにして、叙事詩時代からヒンドゥー教は、かつてのバラモン中心の煩瑣な祭式主義を脱して、しだいに大衆化の方向をとりはじめた。大衆化の大きな特徴の一つは、言うまでもなく、わかりやすさ、簡素化であろう。ここにおいて、ヴェーダ神話における複雑な神々の系譜も、シヴァ派、ヴィシュヌ派とともに、それぞれにシヴァ神とヴィシュヌ神に集約され、それぞれに一元化されていったのである。とくにヴィシュヌ派では、最高神ヴィシュヌを同時にクリシュナという、より身近な英雄的人格におきかえることで、大衆化をいっそう促進させた。いっぽう大衆は、『ギーター』に説かれた高邁な精神性や厳正な義務の遂行の教義よりも、クリシュナに具現される信愛（バクティ）にいっそう心をとらえられた。

『マハーバーラタ』に始まるクリシュナ伝説は、大叙事詩の補遺とされる『ハリヴァンシャ』や、その後の『ヴィシュヌ・プラーナ』『バーガヴァタ・プラーナ』などのプラーナ聖典において、いよいよ神話的展開をみるとことになった。すなわち、神話や伝承が民衆の信仰を高めたとき、信仰はさらなる神話や物語の発展を要求するのである。クリシュナは本来は前7世紀以前に実在した歴史的人物で、『ヴェーダ』などの初期文献では神格を与えられていなかった。それが『マハーバーラタ』では、遊牧部族ヤーダヴァ族の王族の一人で、実はヴィシュヌ神の化身という設定で登場するのである。ところがおもしろいのは、叙事詩第一巻で、クリシュナの尽力によってクル族の王位につくことになったユディシュティラの帝王即位式（ラージス-ヤー）にあたり、かねて美しい婚約者をクリシュナに横取りされたため彼に激しい敵意をいだいていたチュディ国王のシシュパーラ（クリシュナの従兄弟にあたる）が、居並ぶ諸国の王たちの面前でクリシュナをつぎのように悪しきまに罵倒する場面である——

——王でもなく、師匠、供儀司祭でもないクリシュナに最初の“名誉礼”を捧げるとは、われらを侮辱するために招待したも同然であろう。

また言う——

——こんな、元はといえどたかが牛飼い風情の男を誉めそやすとは焼きが回ったな。やつの好色と気まぐれな恥知らずは子供でも知っておる。

この悪口雜言にたいして、ユディシュティラ王の大伯父で、クリシュナの「名誉礼」を推挙したビーシュマが、クリシュナの徳性と神性をつぎのように喝破する——

——彼には二つの美德がある。ヴェーダ、ヴェーダーンタに通曉し、かつだれよりも優れた勇気の持主だ。この二つを彼ほど兼ね備えた人物が他にいるか。クリシュナこそ宇宙の創造主の化身であり、一切の被造物は彼から生まれたのだ。

(引用は、山際素男編訳『マハーバーラタ』第一巻「シシュバーラの暴言」より。傍点は筆者。)

引用にさいし、筆者が「おもしろいのは」とことわったのはほかでもない。『マハーバーラタ』の編者が、神話物語の主人公としてのクリシュナを「宇宙の創造主の化身」とするいっぽうで、歴史的人格としての彼の出自をはっきり「元はといえばたかが牛飼い風情の男」と言明している点である。そして、さらにおもしろいのは、叙事詩のヴァリエーションである『ハリヴァンシャ』やプラーナ文献では、クリシュナのこうした二元性が踏襲されたばかりか、「たかが牛飼い」と揶揄されたクリシュナの人間的側面をより強調しながら、彼の人間的な愛のいとなみ——ときにはエロティックなまでの——をとおして、ヴェーダの畏怖の神々から、新しいプラーナ時代の、言わば庶民の愛の神へと、神そのものの理念や、神と人間の関係までが大きく転換したことである。

つぎに、「彼には二つの美德がある」という、ビーシュマのクリシュナへの讃辞に注目したい。すなわち、「ヴェーダ、ヴェーダーンタに通曉し」というのは、明らかにバラモンの徳性をたたえる言葉であるが、つぎの「だれよりも優れた勇気の持主」は、クシャトリヤの徳性への褒め言葉にはかならない。ここでもまた、かつてのバラモン中心ないし優位のバラモン教から、クシャトリヤへ、さらには後代の神話の継承発展に見るヒンドゥー教の庶民階層へのひろがりの出発点を読みとることができるのである。

クリシュナの庶民性は、その名の「クリシュナ」が「黒色」を意味することからも想像できるように、おそらく彼は、肌色の白いアーリヤ人ではなく、先住被支配民であったことによるものと思われる。一説によると、クリシュナはもともと実在の人物ではなく、ヤーダヴァ族の信奉していた太陽神であったというが、いずれにせよ、クリシュナは初めから「バラモン教の信仰に敵意をいだく者」であり、「必要とあらば力をもってしても、かならずや牝牛崇拜を招来させよう」と考えていたという(A・

」  
P・カルマルカール『インドの宗教』）。さらに、クリシュナ信仰の揺籃期に、その広布に貢献したのが、主として牛を崇拝——すくなくとも尊重していた、先住牛飼い族たちであったことは注目される。

したがって、『マハーバーラタ』でシシュパーラから「たかが牛飼い」と罵られたクリシュナは、『ハリヴァンシャ』やプラーナ文献では、だれはばからぬ「牧童」である。彼はまず、生まれ落ちるや、英雄誕生の予言を恐れた悪王カンサの毒牙を逃れて、兄のパララーマ（ヴィシュヌ神の第八化身とされる）とともに牧人ナンダ夫妻に託されて養育される。クリシュナは早くから並みはずれた怪力ぶりを発揮しながら、ヴリンダーヴァン（ヴリンダーの森）で横笛を吹き、牛たちとたのしい日々を過ごす。そして、若きクリシュナは美男の牧童として、彼を恋慕する数多（あまた）の牧女（ゴーピー）たち（彼女らは『マハーバーラタ』には登場しない）に囲まれて、共に歌い、踊り、戯れる。なかでも、愛人ラーダーとの恋物語は、ヒンドゥーの心を魅了してやまず、古来インドの文学や美術、演劇、舞踊と、インド人のもっとも愛好する主題（テーマ）である。

民衆はいっぽうで、つぎつぎに悪魔や悪鬼を退治し、暴君を殺戮してゆくクリシュナの痛快きわまりない武勇譚に喝采をおくるが、同時に、ゴーピーたちを熱愛し（愛され）、牛たちをやさしく見守る牧人クリシュナを見て、その人間らしい平和な暮らしにあこがれる。まさに、クリシュナの楽園が「ゴーローカ（牝牛の世界）」と呼ばれるゆえんである。ここでは牛のイメージは、神に愛されてしかるべき純朴・温柔・忍耐・献身・有益である。そして、しばしば神仏の持者（じぶつ）や乗り物がそれ自身、独立して人びとの信仰の対象となるように、牛そのものが神聖視され崇拝されてゆく過程も納得がゆく。こうなると、人間の神話的空想はとどまるところを知らない。ついには、ヴェーダの神々までが呼びだされ、アシュヴィン双神のやどる鼻から、ヤマ（死者の王、仏教の閻魔大王）のやどる尻尾まで、牛の体の各部分には神々がやどると考えられるようになった。ヒンドゥーが臨終にさいして牛の尻尾に触れることを願うのは、死の神ヤマの手に導かれて、やすらかに黄泉（よみ）の国に行けると考えるからである。したがって、牛の屠殺や食肉など言語道断とされたのは言うまでもない。こうして牛殺しは、バラモン殺害に準ずる大罪とされたのである。



## インド 1990年代 —独立後50年の回顧—

黒沢 一晃

(神戸松蔭女子学院大学教授)

1947年8月、実質200年にわたるイギリスの植民地支配を脱し、念願の独立を果たしたインドは、民主主義の実現と国民的統合の達成を国是としてきた。そして、インドが曲がりなりにも議会民主主義を守り、政教分離主義（Secularism）を標榜してきたということは誇るべき事実と言えよう。ところが、インドには、言語・カースト・宗教・人種等々、そのいずれをとってもこのような理想の実現を妨げるような、異質の分裂要因が数多く内在し、そのいずれもが、国民的統一にとって大きなマイナスの要因となって働いている。そしてそれが、新国家建設の過程において、いろいろな社会集団のあいだに微妙な歪みを醸し出し、それがインドの政治・経済の各断面において多くの不協和音を生み出していることもまた紛れもない事実なのである。

### Is New Independent India Viable? (新生インドは生き延びることができるか?)

しかしながら、見方を変えれば、これこそがインド社会の現実なのである。印度亜大陸はその歴史において、決して一度たりとも一つの国であったことはなかった。公称面積 328万km<sup>2</sup>は、E C原加盟6か国を合わせて 117万km<sup>2</sup>、それにイギリス、デンマーク、アイルランド、イベリア半島とスカンジナヴィア半島の国ぐにを加えた 328万km<sup>2</sup>に匹敵する。そのようなところに一つの統一国家を建設すること自体が大きなチャレンジであったと言うべきであろう。上記の “Is new independent India viable?” というのは、独立直後の1940年代の後半に、ヨーロッパのインド研究者たちが好んで口にした言葉であった。

印パの人々は、その独立を「分離---Partition」ということばによって捉えているが、事実両国は、この独立を印度とパキスタンとの分離独立という代償を得て獲得したのであった。そして今もなお両国のあいだには、カシミールの帰属問題が、喉にささった小骨のように、厳存しているのである。

## 政治と経済のはざまに

インドは独立以来数次の5か年計画を推進してきた。計画経済は、故ネルーの言葉によると、経済建設への科学の応用と言えるが、インドにおける計画経済の理念は社会主義型社会の建設であった。これは、生産手段の国有化にまでは踏み込めないが、分配の過程において社会主義的 ideal を実現したいというものであつた。社会主義社会と言えず、社会主義型社会と言わざるえ得なかつたものである。その中途半端さが禍して十分な成果を挙げることが出来なかつた。それはともかく、その計画が必ずと言っていい程に、印・パ紛争、石油ショック、国内の政変等々の、国内外の政治的あるいは社会的動乱によって挫折したのはインドにとって不幸なことであった。その功罪を問うに、食糧の備蓄も2～3千万トンに達し、インド国民はやっと飢餓の恐怖から解放されるようになったものの、長年の中央集権的開発政策の結果、地域間の経済格差が出来てしまつたこともまた事実であった。また、一時は外貨準備も輸入の2週間分をやっと賄える11億ドルに落ち込み2桁台に昂進していたインフレも、IMFの援助もあって、ナラシマ・ラオ首相／マンモーハン・シン蔵相の名コンビによって見事に克服されたが、これまた愚にもつかない政争によって長続きしなくなる。我々は、その一例をアヨーディア問題に孕まれるコミューナル紛争に見る所以である。

## インドのコミューナリズム

インドが国是とした民主主義の確立と国民的統合を求心力と位置づけるならば、それをぶち壊すような阻害要因、すなわち遠心力が働いている。インドでは、カースト、人種、言語、宗教といった、多くの阻害要因が存在するが、とくに狂信的な国粹主義と結びついた宗教観が、コミューナルな問題として浮上してきた。80年代のシク問題、タミル問題、90年代のアヨーディア問題がそれである。シク問題は、インディラ・ガンディー女史の暗殺につながり、タミル問題はその息子ラジーヴ・ガンディーの暗殺へとつながっていく。そしてアヨーディア問題はインドの国論を二分する大問題となつた。このアヨーディア問題とは、ウッタール・プラデーシュ州にあったモスク（ムスリムの聖廟）が、実は、ヒンドゥー信仰の権化とも言うべきラーマ神の生誕地に16世紀に建てられたヒンドゥー寺院を取り壊してその跡地に建てられたものであるとする、狂信的ヒンドゥー教徒の主張が、ヒンドゥー教徒の政党である「インド人民党（BJP）」とその一翼を担う「世界ヒンドゥー協会（VHP）」の支持を

得ることとなり、このモスクを破壊してそこにヒンドゥー寺院を建立すべしという一大運動が展開されるのである。インド各地から煉瓦が集められ、おびただしい群衆が鳴り物入りでアヨーディーに向かって行進するという事件が1990年10月に起こり、全国でヒンドゥーとムスリムのあいだに衝突が頻発し、数か月以内に千人以上の入命が失われるという事態が招来されることとなった。党首アドヴァニ氏の逮捕の結果、BJPは中央政府に対する支持を撤回し、政府は総辞職を余儀なくされることとなる。危機はこれで終わらなかった。アヨーディーでの犠牲者の遺灰を詰めたといわれる壺が全国津々浦々に配られ、百万人の有志を動員し、全国で3千のモスクを破壊しようという計画すら練られたのである。ヒンドゥー教復古運動がインド民族主義の名を借り、「インドの国家的恥辱の象徴」としてのアヨーディアのモスク破壊が叫ばれたのである。

### インドの政治とインド国民会議派

インドの政治史を論ずるにあたって無視することの出来ないのは、「国民会議派」の存在である。1885年に発足した「国民会議派」は、もともとはインドにおけるイギリスの善政を求める超党派的存在であった。「ネルー王朝」という言葉がまかり通っていたが、インディラ・ガンディー女史は、独立の闘士であり国民会議派の巨頭であったジャワルハルラール・ネルーの愛娘であり、モティラール・ネルーの孫娘にあたる。その息子であるラジーヴ・ガンディーは、母親インディラの懇請によって政界に引っ張り出された人物であるが、元来は政治ぎらいの清廉潔白な人物であったといわれる。それが、こと志と異なり次第に政界の泥沼に足を突っ込むこととなり、最後は選挙の遊説中に爆弾を仕掛けられて死亡するのであるが、このたび「インド国民会議派」総裁に選ばれたソーニア女史は、その未亡人である。

インドという国は、カースト制度にも見られるように、大いに血統を重んずる国ではあるが、如何に独立時におけるネルー家の貢献が大きかったとはいえ、その家系には、1975年の「非常事態宣言」の引き金ともなった悪評さくさくのサンジャイ・ガンディーという人物の兄でもあったわけで、その未亡人が独立後50年も経ついま、「国民会議派」の総裁に推されるとは、政治の私物化もここに極まれりとの感を深くする次第である。

## インドとパキスタン

上述のように、政治的力学によって分離独立したインドとパキスタンは、何度かの戦争と呼ぶに相応しい「紛争」を交えながら今日にいたったわけであるが、最近の動向として、経済交流を手掛かりとして両国のあいだに緊張緩和の兆しが見られる。印パ両国間直通バスの運行、相互の輸入障害撤廃、パキスタンからインドへの余剰電力売却交渉がそれである。本年2月の「ラホール宣言」に結実するかに見られる両国の接近も、1998年の両国の核実験に対する、袋叩き的国際世論に対する共同被害者意識のなせるものでなければよいがと願うのは私のみであろうか？

今世紀中に10億の大台を越える人口を有する世界第2の人口大国インド。その上位の2～3割は人間的生活をエンジョイ出来るが、下位の3～4割は未だに貧困線下に喘いでいると言われる。このインドの帰趨こそは、21世紀のアジアの、否、世界の運命を左右するのではないだろうか？ 同国の健全な政治的発展を望んでやまない。



## 地球化時代のヒンドゥー教

田中 雅一

(京都大学人文科学研究所)

最近かならず毎日送られてくる電子メールがある。それはスプラマニヤスワーミという聖者の書いた書物の一節である。一節毎に送られてくるのである。これはハワイのカウアイ島に拠点を置くスプラマニヤスワーミが率いるヒンドゥー教団のメール・サービスである。希望者はメニューから何を毎日送ってもらうかを決める。聖者の著作だけではない。『ティルクラル』のように、タミルの聖典（ヴェーダ）とされる書物もある。

スプラマニヤスワーミはカリフォルニアで1925年に生まれた。すでに70歳をこえている。彼は1945年にスリランカのタミル文化の拠点ジャフナにわたり、そこでサイヴァ・シッターンダ（中世南インドで生まれたシヴァ神を主神とする一派）の聖者の一人ヨーガスワーミに出会う。彼のものとて1949年から修行をして、1960年に晴れて後継者となった。1968年にジャフナを離れ世界流浪の旅に出て、ヒンドゥー教を教えを広める。こうして出会った弟子たちと1970年にハワイのカウアイ島に渡り、岡の麓にあったホテルを改築して僧院にして、共同生活に入る所以である。そこにはシヴァを本尊とする寺院があり、25名の出家僧が住んでいる。女性は認められていない。ハワイに移り住んだ当初は欧米とアジア、とくにアジアの中でもタミル人の集住しているシンガポールやマレーシア、モーリシャスなどで活動する。この成果が実って、若い弟子の大半はアジアからやってきたタミル系のヒンドゥー教徒である。高齢のためと、世界的なネットワーク技術の発展によって、スプラマニヤスワーミがハワイから外に出ることはほとんどない。実際、つい最近もカナダのタミル人コミュニティーの集まりで、スプラマニヤスワーミは衛星放送でお祈りをささげたという。

僧院に入れるのは25歳までである。私に話をしてくれたのは、ヨーギ・タプダーナさん。1986年にマレーシアのクアラルンプールでスプラマニヤスワーミに会い、彼の教えに惹かれて3年後にハワイに渡り、僧となつた。当時20歳であった。



(スプラマニヤスワーミ——僧院前の店舗で発売のポスターより)

簡単に僧院の組織を紹介したい。僧は修行に応じて4段階に分かれる。最初の段階はプラフマチャーリヤと呼ばれ、白い服を着る。この段階にいるのはアメリカ人2名だけである。ここで2年ほど修行するとつぎがサーダカである。ここにはスリランカ、モーリシャスから各1名、アメリカ人が4名いる。この段階には3~4年とどまり、清貧、服従などの4つの戒律を守る。シヴァが身につけている首飾りをつけ、服装も白地に黄色の線が入ったものに変わる。第3段階がヨーギで、黄色の服を着て、ここで始めて出家の戒律を受ける。マレーシア人2名とモーリシャス人1名がこの段階に属する。最後がスワーミで、アメリカ人13名、マレーシア人1名である。彼らは還俗不可能で、ほとんどが初期の弟子たちである。オレンジ色の服を着る。

この僧院にはナタラージャ（踊るシヴァ神）を本尊とする寺院があり、ここが僧院の活動の中心となる。一日に8回、3時間毎に礼拝をする。ここにはシヴァ神の2人の息子、象頭のガネーシャ（歓喜天）とムルガン（章駄天）も祀られているが、女神の像はない。礼拝の当番はプラフマチャーリで、3時間毎に寺院に入って、当番を待つ。この僧院の支部が他にモーリシャスにある。

年中行事は3回の祭りだが、これはすべて先代の師への供養となっている。ヨーガスワーミ師の誕生日である5月9日、入寂した1月5日、そしてすべての師を供養する夏の満月寺の祭りである。

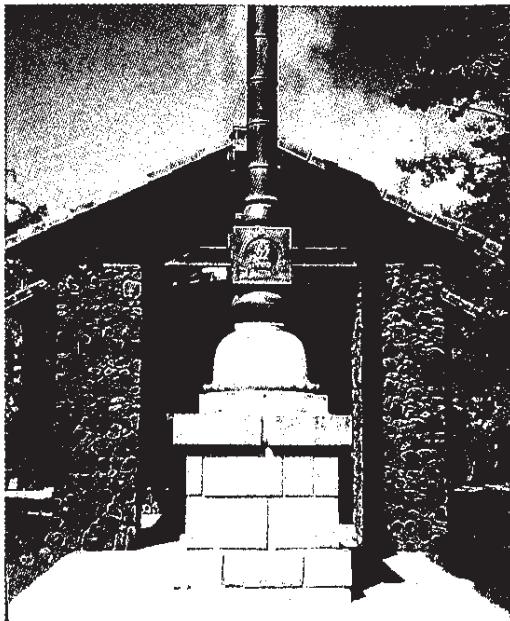
僧たちの一日はつぎのようなものである。

夜明け2時間前に水浴をする。寺院に参拝して礼拝に参加する。その後、瞑想やマントラの読唱がある。6時ごろ朝食、このときは主として果物を食べる。7時から12時半までは仕事をする。僧たちは5つに分かれてい、そこでの仕事を行う。すべての部には担当のスワーミがいて、その下ではかの僧たちが働く。彼らはスワーミと異なって部を変わる。なお、5つとは、寺院と台所（料理）担当の部、資金調達の部、教育・在家信者担当の部、渉外部、建築物の修復部の5つである。

その後、昼食を食べてから昼寝をする。3時から水泳などの体操、4時から6時まで再び仕事、簡単な夕食をとってからは9時ごろまで自由時間である。なお食事はすべて菜食で僧院に農園がある。

この僧院の活動でもっとも注目されるのが、月刊『現代ヒンドゥー教』の発刊であろう。全カラーで、世界中のヒンドゥー教およびヒンドゥー教徒についての記事が盛りだくさんである。現在、33カ国、15万部発刊されているという。ここには現代

のヒンドゥー教が直面している様々な問題が窺われる。その一つは、世界中に散らばっているヒンドゥー教徒たちの伝統の継承の問題である。『現代ヒンドゥー教』はこうした人々のニーズに応えるために様々な教育商品の広告を掲載している。それはインドについての CD-ROM であったり、ビデオであったりする。これは決して新しい現象ではないが、出家した僧たちの活動が世を捨てるどころか、ますます世、それも文字どおり地球規模で世間に関わっているというのは、なんとも皮肉である。それを可能にしているのはコンピータに支えられたネットワークなのである。



(僧院に建てられているヒンドゥー寺院、  
著者撮影のスライドより)

想い返せば、この僧たちとの出会いはインドにおいてであった。10年近く前のことである。私が泊まっていたホテルに彼らとその在家信者たちが20名ほど滞在していたのである。ちょうどお祭りの季節であった。このとき話をする機会はなかったが、白い顎髭を伸ばした老人を中心とする白人たちの集団は、物静かではあったがどこから見ても目立ち、ずっと気になっていたのである。再会を果たし、彼らの活動の一端に触れることができたが、まだまだ分からぬことが多い。この夏、彼らに会えるのを楽しみにしている。



## 東インドの仏教 —その魅力と意義—

頼富 本宏

(国際日本文化研究センター教授)

### I. 東西の軸と南北の軸

1990年にベルリンの壁が崩壊して以来、世界の政治体制の上で「東西」という表現がめっきり色あせてきた。かわって先進国と発展途上国の対立を軸として、「南北問題」という捉え方が多く聞かれるようになったことも周知の事実である。

以上は、世界規模から主に政治と経済を見る把握法だが、問題を仏陀釈尊の国インドに限定すると、逆に古来、南北の軸に重点を置きながら歴史が展開してきたと言っても過言ではない。たとえば、マウリヤ朝、クシャン朝、グプタ朝などの統一王朝はいずれも北インドで成立している。

ところで、自然地形からいえば、インド半島は、南北およそ3200キロ、東西およそ（広いところで）3700キロということで、大差ないのであるが、南に下るに従って東西の幅が減少する逆三角形構造になっているため、実質的には東西の距離感は少ない目に実感される。

加うるに、西端の西ガーツ山脈が事実上の分水嶺を形成しており、インドの中央部を占めている有名なデカン高原は、東端に小さな東ガーツ山脈があるとはいえ、西側から東側になだらかな傾斜を有しながら、東のベンガル湾まで連なっている。

その結果、インドの半島部を流れる大河は、最大流域面積を誇るゴーダーヴァリー河、南インド文化の源となったクリシュナ河、そして東インドを潤すマハーナディー河のいずれもが、ほぼインド亜大陸を横断するかたちで西から東に流れてベンガル湾に注いでいる。これらの大河による交通によって、インドの東西感覚はさらに圧縮されていることは疑いない。

これに対し、インドの半島部の根本にあたる部分に東西にヴィンディヤ山脈が走っており、その北部に、東流するガンジス河と西流するインダス河が分水嶺を持たない広大なヒンドゥースタン平原を形成している。

この自然の地勢によって、北インドと南インドが大きく区分されることになり、歴

史的に見てもヒンドゥークシュ山脈を越えてインダス平原に侵入した古代のアーリヤ人たちも、南インドに影響を与えるには多くの年月を要し、しかも先住のドラヴィダ系の民族文化を完全に駆逐することはできなかったのである。

## II. 東インドとは

現在のインドを対象として「東インド」という場合は、文字通り「東部のインド」に位置する西ベンガル州、オリッサ州、アッサム地方の諸州、そしてガンジス河沿いのビハール州を指す。

ところが、7世紀の頃にインドを旅行した玄奘三蔵の『大唐西域記』などによれば、仏陀釈尊が主に活躍したマガダ（摩揭陀）国は、現在ではビハール州に属しているものの、やはり釈尊の根拠地であったためか「中天竺」とされている。

このように、古代と現代では「東」の意味する範囲に多少の違いがあるが、いずれにしても「東インド」の代表とされているのが、東インドの中心地カルカッタから西南のベンガル湾に面したオリッサ州である。

私は、このオリッサ州と非常に縁が深く、過去4度、現地調査に訪れたのみならず、今年から来年にかけてさらに意義ある調査計画を企画している。

このオリッサ地方の文化、とくに仏教が持っていた意味を日本や中国との関係を明らかにしながら、4つのポイントから紹介してみたい。

## III. 瑞穂（みずほ）の国オリッサ

インドに詳しい日本の方でも、東インドのオリッサ地方のことを知っている人は少ない。なぜならば、仏教者の等しく憧れる仏陀釈尊の直接の故地、つまり仏跡ではなく、また最近その壁画や彫刻でとみに注目を集めているアジャンター・エローラなどの著名な石窟寺院を持っていないからだ。

私たちが最初にオリッサを訪れた昭和55年の頃には、1ヶ月以上滞在していて出会った日本人はわずかに1人、現地の合弁会社で製鉄技術を指導している技術者であった。そういうえば、私も30年前に高校の地理で「オリッサの鉄・ビハールの石炭」という言葉を習った記憶があるが、現地に来てやっとそれを実感した次第であった。

最近、日本でも八幡神と銅、弘法大師と水銀など、宗教と鉱物資源の密接な関連に注目する、いわゆる鉱物史観が抬頭してきたが、オリッサの鉄は確かに仏教や仏教美

術と無関係ではないことは興味深い。

それよりも、オリッサへ行って、まず最初にほっとするのは、数十年前の日本の農村風景が今も生き続いていることだ。申し遅れたが、オリッサ地方は、近世までの文献ではオディサ (Odisa) と呼ばれているが、語源的には「米」と関係を持つ。牛が水田を耕し草を食う、のどかな田園風景からも知られるように、古くからオリッサは「米が成育する地方」、「米を食する地方」と理解されていたことがわかる。

さて、この平和な国オリッサ、とくにその仏教を20世紀末の現在に取り上げるには、以下の4つの理由と意義があるからである。

第1に、元来、釈尊の活動範囲の外にあった東インドのオリッサが、結果的に仏教と関わりを持つようになったのは、歴史の皮肉というべき侵略戦争の結果であったのである。

紀元前3世紀の頃、現在の北インドのパトナ（旧名パートリープトラ）に都を置いたマウリヤ（孔雀）王朝のアショーカ王は、大軍を率いてオリッサにあったカリンガ王国を武力征服した。

このとき、15万人以上を捕虜とし、双方とも無数の死傷者を出した。戦争の悲惨さを後悔したアショーカ王は、武力による征服から法による統治へとその方針を転換することとなったという。

現在でも、オリッサでは、2カ所にアショーカ王が仏法を鼓吹するために刻ませた法勅碑文が残されている。なかでもオリッサ州都のブバネーシュワル南方11kmのダウリには、現在、日本山妙法寺によって白亜の大塔が建立されているが、その山裾に巨大な岩に刻まれた象の前半身と刻文が残されている。この碑文は、「すべての人民はわが子なり」という表現があることで知られている。

冒頭で述べたごとく、東西冷戦の終結によって、少なくとも政治体制の対立に起因する戦争の恐れは減少したが、セルビア紛争や南アジア（スリランカ、カシュミールなど）のテロ事件に見られるように、民族や宗教による流血は一向になくならない。

各宗教の寛容性と攻撃性にバラつきがあるので、対立・抗争が一挙に消滅するのは困難かもしれないが、複数の宗教の併存を容認したアショーカ王の現代的意義は、もう一度歴史的論議の対象とする価値はあるだろう。

#### IV. 玄奘三蔵の伝えるオリッサ

オリッサ仏教の中で第2に注目すべきは、7世紀の前半に、中国の仏教僧・玄奘三蔵がインドを一周する旅行の途中、「烏茶（うだ）国」、「恭御陀（きょうごだ）国」と呼ばれていたオリッサを通過したことである。

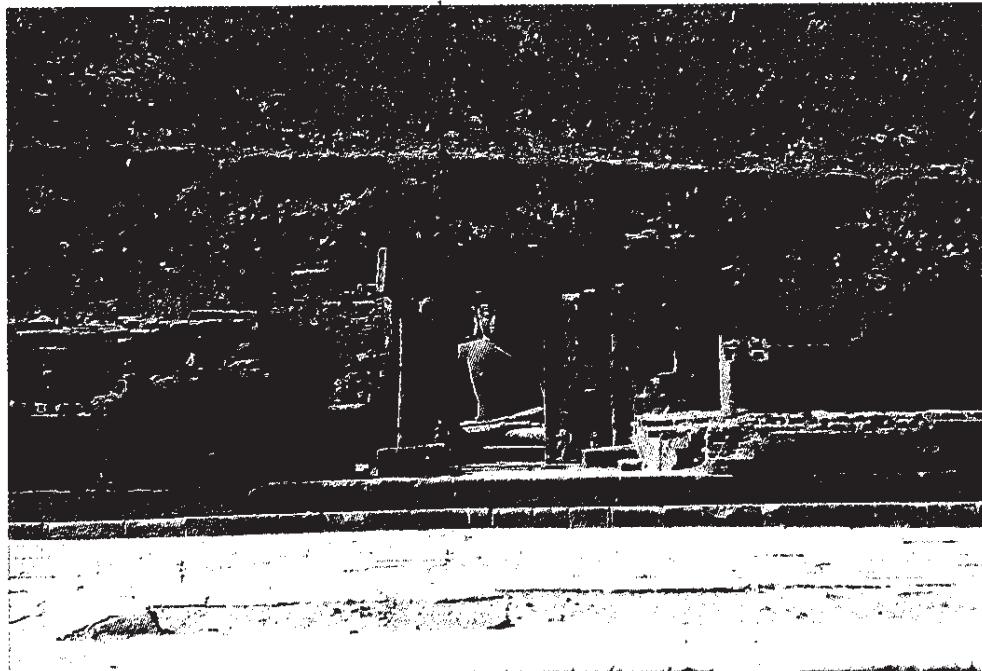
とくに、オリッサ北部の烏茶国に関しては、

「烏茶国は、周囲七千余里、大都城は周囲二十余里ある。土地は肥沃で、農業は盛んである。（中略）

学芸を好んで飽きることがなく、多くの者は仏法を信じている。寺院は百余カ所、僧侶は一万余人で、みな大乗仏教を学んでいる。天祠（ヒンドゥー教、もしくはジャイナ教の寺院）は五十カ所で、異教の人びとが雜居している。（抄訳）」

と記述しているが、このように大乗仏教が栄えて、しかもヒンドゥー教と混合した社会生活が行なわれている文化状況は、玄奘当時のインドの宗教事情を端的に表現するのみならず、次に取り上げる『大日經』の成立背景とよく符合している。

ところで、玄奘の『大唐西域記』には、続けて「プシュパギリ僧伽藍」を取り上げ、



（新発掘されたウダヤギリ遺跡）

次のように説いている。

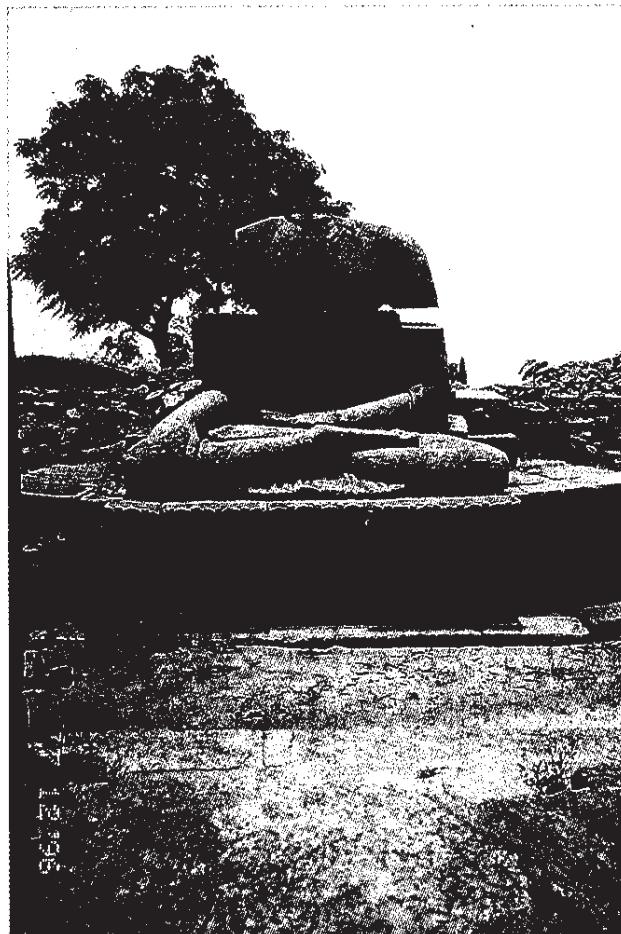
「国の西南境の大きな山の中にプシュパギリ（意味は花の山）僧伽藍がある。その石塔は鉄を引きつけるなどの靈験が多い」

このプシュパギリ寺院が、海岸沿いではなく、「山中」にあり、しかも「石塔」があることから、多くのオリッサの学者やわが国のオリッサ研究の創始者である故佐和隆研博士は、巨大な大塔を誇るラトナギリ遺跡の可能性を指摘してきた。

オリッサの州都で、「インドの奈良」とも称されるブバネーシュワルは、リンガラージャ寺院をはじめヒンドゥー教の古寺名刹が林立している。そのブバネーシュワル市から東北数十キロのカタック地区に点在するラトナギリ、ラリタギリ、ウダヤギリの各寺院趾と出土の仏像については、佐和博士をはじめ筆者（『密教仏の研究』法蔵館）、宮治昭（名古屋大学）、森雅秀（高野山大学）などの各氏によってわが国にも広く紹介されている。

また、近年、インド政府の観光局とオリッサ州政府がオリッサの仏教遺跡を目玉として日本からの観光客の招聘を意図した調査に参加した写真家の丸山勇氏、研究者の定方晟（東海大学）、市川良文（龍谷大学）の両氏によって最新の情報が提供された。

それによると、ウダヤギリ遺跡の北西方約十キロのラングリ丘の発掘遺跡から新たに多



（新発掘されたラリタギリ遺跡）

数の仏像と小仏塔（奉獻塔、個人が供養のために製作し、納める石塔）が出土し、併せて発見された刻文の中に「プシュパギリ」の語が見られるという。（定方晟「オリッサ州の仏教遺跡」）。

それが事実ならば、玄奘の記録の真実性が確認されることになるが、写真資料による限り判断は難しく、現地のオリッサでも、発掘担当者のプラダン氏のこの説に対して疑義を唱える学者も少なくないという。

なお、私も佐和先生に続いてオリッサの仏教と仏教美術を紹介した縁があり、この「プシュパギリ僧伽藍」ともう一つの海辺のチャリトラ城とその5つの伽藍に大きな関心を持っている。

幸い、新しい職場に転じて研究の時間が十分にとれるようになったことと、大手のA新聞社の創刊百二十周年記念企画の「三蔵法師の道を行く」の研究会メンバーに加えていただいたので、ラングリ丘遺跡の検証を兼ねてオリッサにおける玄奘三蔵の記録の追跡調査に取り組みたい。

V. 『大日經』のふるさと  
私がオリッサの仏教的意義を強調する第3の理由は、多數の密教像を出土していることであり、とくにこれまで不明といわれていた『大日經』・胎藏曼ダラ系の仏像や真言がラトナギリ・ウダヤギリ・ラリタギリの3遺跡から発見されたことの意義は大きい。



(尊名未比定の仏像群)

もちろん、最近では、中インドのナーランダー遺跡や西インドのエローラ石窟からも胎藏大日如来と考えられる石像が発見されたので、軽々に結論付けるには慎重を期さなければならないが、すでに拙著『密教仏の研究』や現在、長期連載中の『大法輪』誌の「大日經入門」に詳しく説明しているように、東インドのオリッサは『大日經』の成立地、一步退いても、流行地であったことは疑いないであろう。

その主な理由を以下、箇条をあげて列挙しておきたい。

- (1) 図像研究の長足の進展によって『大日經』の本尊である胎藏大日如来にも、高い髻（もとどり）を結うだけで、宝冠や装飾品を身につけない、俗にいう如来形の大日如来（「胎藏図像」系）と長髪の上に宝冠をいただき、胸飾りや腕輪などをまとう菩薩形の大日如来（現圖系）の二様があることが知られているが、オリッサの3遺跡からは如来形（ラリタギリ2体）、菩薩形（ラトナギリ3体、ウダヤギリ1体）の2種の大日如来像が発見された。二様の大日如来像が併存しているのは東インドのみである。
- (2) 『大日經』を漢訳した善無畏三蔵は、自分自身で梵本（一部のみ）を持っていた。彼の出自については『宋高僧伝』に、「その先は、中天竺よりす。国難によって分かれて烏荼国（オリッサ）に王たり」とあるごとく、先祖は中インドにいたが、その後に分家してオリッサに移ったとする。

当時のオリッサの王朝は、仏教を保護したことでも有名なバウマカラ王朝であったことは諸学者の見解が一致している。その王統の中に、少し時代が下がるが、善無畏と同名のシュバカラシンハの名前を持った王が数人存在していたことは無視できない。

『大日經』の大家であった善無畏が、中インドのナーランダー僧院で勉学したことも事実であろうが、ナーランダーとオリッサは直線距離にすると、数百キロの範囲内に収まるものであり、インドでは遠い距離ではない。

その他、『大日經』の先駆経典となった『華嚴經』の「入法界品」の中にトーサラナガラなどのオリッサの地名が出てくるなど、『華嚴經』の海の思想は、海浜国オリッサとよく一致する。

また『四十卷華嚴經』の梵本がオリッサの王から唐朝の高宗皇帝に献上されたことは有名な史実であり、嬉しいことに平成8年7月、久しぶりにオリッサを訪

れ、ラリタギリの現地収蔵庫へ立ち寄ったところ、いつの間にか英文の紹介文が掲示されており、そこに私が述べた善無畏のことなどが詳しく説明されていた。

インド人の学者は、梵本が遺存していない『大日経』には知識がなかったが、最近では英文論文を通して日本人の研究を見直すようになったのは進歩だと評価したい。

## VI. 未解決のウディヤーナ論争

オリッサの仏教、とりわけ密教の歴史の上でもう一点論争の的となっているは、後期密教（一般にいうタントラ仏教）の聖地ウディヤーナの比定である。いわゆる純密が中心で、後期密教の伝承がない日本では、まったく聞かれない密教の聖地であるが、たとえれば、わが国の高野山や成田山のように人口に膾炙していた。

密教の聖地としては、この他に、カーマルーパ、プールナギリ、ジャーランダラなどが著名であるが、このうち東北インドのアッサムに比定されるカーマルーパを別にすれば、残りの2つはオリッサ地方に比定できる個所がある。

肝心のウディヤーナに対しては、チベット学者のL・ワッデルやG・トゥッチなどがパキスタン領のスワート地方と同定し、一応多数派を形成しているが、惜しいことに決め手となる密教（とくに後期密教）系の出土品が皆無に等しい。

しかるに、オリッサは他の聖地に近いだけでなく、ヨーギニーやナイラートマー（無我女）などの後期密教系の女尊像を多数出土している。また、ウディヤーナの一部であるシャンバラは、オリッサの西部のサンバルプルに同定されており、現に仏像が数体出土している。ヒンドゥー教の女神崇拜の寺院も少なくない。

それゆえ、論争を決着するにはもう少し資料を準備したいが、東インドのオリッサは仏教の初期から最終段階の密教の時代までヒンドゥー教と混淆しながらも、中印度・北インドに劣らぬ仏教のセンターとして重要な役割を果してきたのであり、日本の人びとにも関心を持っていただければ幸いである。



## 悠久の国、インドに想う

栗原 俊哉

(自然美グループ代表・

国連支援交流財団・常任理事)

私が始めてインドを訪ねたのは、1990年の1月のことである。悠久の国、仏教発祥の地インドはを訪ねることは、仏教徒である私にとっても永年の願望であった。整然として美しい計画都市ニューデリー。

ひしめきあう露店、物売り、馬車、人力車、トラック、放し飼いの牛。むせかえるような熱気と群衆と喧騒の町オールドデリー。

バナーラスの聖地ガートを訪れた時の印象は強烈で、私の人生観を変えた場所でもある。ガンジス河中流域の要地に位置するバナーラスは、紀元前一千年前より栄え、シヴァ神を祀る重要な聖地として知られている。

早朝ホテルを出発して、ヒンドゥー教徒の聖地、ガンジス河のガート（沐浴場）を訪れた。日の出前の暗い道を多くのヒンドゥー教徒と共に黙って歩き、ガンジス河の岸辺に連なる石段、宮殿跡や館をながめながら日の出を待った。

露店で遺体を火葬する有り様の一部始終を合掌しながら見る。聖なるガンジス河に身を清め、黙念と瞑想する人々、私たちの理解の枠を超えた宗教的ノスタルジアの世界を目の前にして、人生観が変わるほどの衝撃を受けたことを昨日のように鮮明に覚えている。

その時の印象を拙文にまとめたものを、当「関西日印文化協会」創立40周年の記念のお祝いの言葉に代えさせていただきたいと思います。

## 仏教発祥の地に立ちて

今を去る二千六百年の昔、釈迦族の王子、シッダールタは、  
生老病死の解脱を願い、求道の修行に入る。  
苦行過酷の衰弱の身体を尼蓮禪河で癒し、  
ブッダガヤの菩提樹のもと結跏趺坐して悟諦思念す。  
明けの明星いざる時、刹那成道、自受法樂を得る。  
この一瞬の開悟はゴーダマブッダの誕生となり、世界史に輝く仏教の確立となった。  
大智度論に云く「ここに無明が滅して明知が生じた」・・と。

因習深き宗教界の維新と絶望カーストの束縛より、衆生救済を決意せし釈尊は、  
平等大慧、出離生死、常樂我淨の哲理をもって、教法流布に旅立ちぬ。  
釈尊云く。「人間は生まれによって賤しいにあらず、生まれによってバラモンにあ  
らず、人間は行為によって賤しくなり、行為によってバラモンとなる」・・・と。

鹿野苑での初転法輪は、阿若僊陳如等の五人の僧に  
阿含四諦と八正道を説き、仏教流布の一歩を印す。  
やがて靈鷲山会で法華經を説き、釈尊出世の本懐を遂げ給う。  
ひたすら不自惜身命、衆生済度の実践を貫き、  
我常在此、娑婆世界、説法教化の孤高の生涯を送る。  
臨終間際、説法せし釈尊は、沙羅双樹の床の上、八十年の魂を涅槃し給う。

その崇高峻厳を讃嘆し、仏伝に云く。「そのとき沙羅双樹が時ならざる花に咲き、  
満開となつた。  
それらは如来を供養するため、如来の体に注ぎ、降り注ぎ、散り注いだ。  
また、天の曼陀羅華は虚空に降つて、如来を供養するために、  
如来の体に注ぎ、降り注ぎ、散り注いだ」と。  
とまれ釈尊の八万四千の法門は、月の西より東を照らすが如く、東土にわたりて結  
実した。  
いま、日の東より西に帰るが如く、東土より光明は西を照らす。

アーノルド・トインビー云く。

「人類共存共栄の唯一の道は、文明の生み出した高等な宗教による人間の救済であり、その最も優れた宗教は、アジアに於ける大衆仏教である」と。

カール・ヤスパース云く。

「仏教は暴力をふるったことも、ドグマを押しつけたことも一度もなく、仏教戦争もなく、宗教裁判もなく、組織されさ教会の世俗的な政治もなかった」と。

リヒャルト・ワグナー云く。

「仏教の世界観に比しては、おそらくどんな宗教でも、偏狭固陋であると思わざるをえない」と。

### 悠久の国インドに想う。

夜が明けて、太陽が東に昇る。

小鳥は歌い、朝の微風は新しい生命をみじろがす。

おん身の愛の黄金の光線にふれて、

インドは目をさまし、おん身の足元に頭を垂れる。

インドの詩聖タゴールは、誇り高き魂の国の勝利を叫ぶ。

久遠、この地に人類が誕生し、集落が形勢され、宗教が生まれた。

インダス文明の興隆は紀元前二千三百年から千八百年と云われる。

その後、地殻の隆起、洪水その他の理由から文明は衰亡した。

何千年の昔から、チベット・バーミーズ、オーストロ・アジア、ドラヴィダ、アーリアといった幾つかの大きな言語系統民族がインド亞大陸に住み、共存、戦争、混血を繰り返し乍ら、各地で永い年月をかけ、インド民族文化ができた。

紀元前千五百年ごろ、アーリア人がインドに侵入し、先住民族を征服して奴隸となし、バラモン教によってカースト制度が生まれ、その中から仏教が興った。

十一世紀初頭、アフガン地方からガスニ朝の軍が進入してデリーを占拠した。

アイバクは、一二〇六年に王朝を興し、インドにおけるムスリム時代が開幕した。その後、三百数十年にわたるイギリス植民地支配を経て、一九四七年、イギリス支配より独立、イスラム教を国教と定めたパキスタンはインドより去った。

久遠は今に在り、現在も此処にある。

古代より続く宗教的ノスタルジアの世界インド、  
豊かな精神と魂を持つ世界インド、  
貧困と飢餓、何千年の歴史の垢にまみれたカーストの世界インド、  
圧倒される群衆と喧騒のカスバの世界インド、  
幾多の動物や鳥たちとの共生の世界インド、  
太古より人々の生きてきた姿をみせてくれる国インド、  
最古の伝統文化と精神文明を誇る国インド、  
現実生活の貧困と因習に縛られた矛盾にあえぐ国インド、  
我々の価値観では測り知れない、ある種の豊かさがある国インド、  
物質文明の飽和に疲れた私たちを魅了してやまぬ国インド、

あるインド政治家云く。

「私の人生で一番悲しいことは、釈迦やガンジーなどの偉大なインド思想家の教えを、すぐ忘れ去ってしまったことである」・・・と。

あゝインドは私に、今後、長き日をかけて思索し続けなければならない課題を与えてくれたようである。

願わくば、アショーカ王やカニシカ王の如き大指導者の出現と、苦・空・無常・無我の世を開き、常樂我淨の楽土とならんことを。

萩原俊雄。



## 大歓迎を受けた ヒンディー語劇のインド公演

溝上 富夫  
(大阪外国語大学教授)

インド独立50周年を記念して、平成9年末から平成10年始めにかけて実施した、大阪外国語大学学生13名によるヒンディー語劇のインド公演旅行は、何から何まで異例づくめであった。国立演劇学校というインド政府の権威ある機関が、我々外国人、しかも演劇にはずぶの素人を公式に招聘するということがまず異例だった。

デリーでの最初の公演は、デリー大学付属のカレッジの講堂を借りたが、教職員のストにかち合い、付近の道路がピケで封鎖という悪条件にもかかわらず、講堂はほぼ満員となった。大学関係者が多くつめかけたもよう。初めての舞台で、学生は最初は緊張していたが、客席からやんやの声援が飛びにつれ、落ち着いて普段の演技を披露することができた。

続く2日目は、L.T.G.ホールという小規模だが本格的な劇場で、ここも観客席350席をほぼ埋め尽くした。前日以上に熱い声援が飛び、会場は爆笑また爆笑の渦。これほど受けたのは初めてと、出演者一同大張り切りで、これまた大成功。会場には、ネルーニー大学のS.B.ヴァルマー元教授や、インド大使館元参事官のオームヴィカース氏等、懐かしい顔が並ぶ。

しかし、北インドを20数年ぶりに襲った寒波とデリーのスモッグと人込みのため、喉をやられた筆者がせっかくの美声(?)を披露できず、かすれ声で座頭の前口上を述べざるを得なかったのは残念であった。しかし、転んでもただでは起きない主義の私は、声の出ないのをデリーの気候のせいにして、聴衆の笑いをとった。こうなれば、吉本のノリである。吉本といえば、上演した2つのドラマのうち特に好評だった「幕が開く前に」は、どこか吉本調ドタバタ喜劇の趣があり、我々関西人にすんなりと受け入れられたのも、そのせいかもしれない。

デリーでは、大統領官邸と副大統領官邸をそれぞれ別の日に訪れ、全員と親しく会話を交わしていただき、記念写真もたくさん撮ってもらった。大統領と副大統領という、国のトップの要人と会えたということも、異例であった。

ヴァーラーナシーでも大歓迎を受けたが、主催者が地元の某教授とその家族だけであつたため、準備が十分でなく、しかもその教授は、劇そのものの成果よりも、町の有力者を呼んで自らの Show-off の場とすることにより関心があったようだ。劇の初めと途中、さらに劇が終わってからも延々と、出演者不在の儀式とゲストの長スピーチをやった。インド人のセレモニー好きには慣れているが、それにしても、2時間のドラマに1時間のセレモニーとは異常すぎる。おまけに、何も指示を受けていなかつた幕係り（もちろん、その劇場のインド人）が誤って、途中で幕を下ろしてしまったために、劇が終わったものと錯覚した観客がぞろぞろと帰宅を始め、夜10時に劇が終わった頃は、数十名しか残っていなかった。熱演にもかかわらず、当然寂しい反応だった。想像を絶する寒さの中を、出演者は薄着の舞台衣装のまま待機させられ、そのため、実際に学生が次々と倒れたのである。その中には、屈強のスポーツマンもいた。さすがの学生も怒ってしまった。

このヴァーラーナシーの公演の失敗に懲りてから、次のアーグラーでもムンバイでも、とにかくセレモニーと長いスピーチをやめてもらうよう必死の工作をした。インド側も、セレモニー重視派と簡素化派の2派があった。とにかく、素人である学生の演技には、長旅による疲労と、出端をくじくセレモニーのしらけが必ず影響した。ベストの体調と気分で臨まないとベストの演技はできない。「我々はベストの演技をすることで、主催者の好意に報いるのだ」という学生の言い分は正論である。しかし、我々としても、すべてを主催者の好意に頼ってやっているので、ある程度はインド側のやり方に従うのも礼儀だっただろう。セレモニーは日本でもやる。このあたりのバランスが難しいところで、座長の私は、両者の板挟みになって悩んだものだ。

アーグラーでは500名の観客を集め、これまた成功。ただし、この頃から、会場によって、微妙に客の反応が違うことに気がつきはじめる。当然爆笑がとれると思っていたところ、笑いがなかったり、また何でもないセリフがバカ受けしたり、理由はまだよく分からない。神戸のインド人の反応とも微妙に異なっていた。

ムンバイの最終日は、ネルーセンターという超一流の劇場に800名の観客を集め、まさに「異例中の異例」だった。こんな立派な劇場で素人が芝居をするなんて信じられない。ムンバイのアレンジメントはプリヤダルシャニー・アカデミーという民間の文化団体がすべてやってくれた。しかし、マハーラーシュトラ州の文化大臣ナヴァルカル氏を呼んで開会式をやったということは、これはもう、州政府の公式行事に準じ

るのではないか。さすがに、それまで冷たかったムンバイ日本総領事が駆けつけてあいさつした。実は、前日のムンバイ第1回の公演の舞台写真がことあるうに TIMES OF INDIA という一流新聞の一面トップに大きく載ったことが、インド人よりも在留邦人に衝撃だったようだ。仮に天皇の訪問があっても、一流の歌舞伎役者が来ても、あの欄にあれほど大きく報道されることはないだろう。日本関係のニュースとしては全く破格の報道であった。それだけではない。国営、民営を問わず、テレビの全国ネットワークで我々の劇が繰り返して放映されたのである。いかに、インドのマスメディアが日本人のヒンディー語劇に注目したかということだ。お陰で、大阪外大生のヒンディー語劇は、インド中ですっかり有名になった。インド側からすれば、外国人がインドへ来て、インドの言葉でドラマを演じるということがそもそも初めてのことなので、関心をもつのは当然と言えようが、それだけでは報道しないだろう。やはり、演劇学校で一定の評価を得ていたからだろう。日ごろの練習の成果と素直に喜びたい。

我田引水でも、自画自賛でもなく、我々大阪外大ヒンディー語劇団一座が、日印の文化交流の歴史に残る功績をあげて帰国したことは、客観的事実としていえる。また、インドの人びとの温かさを、今回ほど強く感じたことはない。そもそも、このインド公演は、神戸での公演が契機となっており、国立演劇学校に推薦状を書いてくださったアショーク・クマール大阪神戸インド総領事と、多額の寄付金を頂いたインド商業会議所に深く感謝したい。



## 新しい老後の生き方を求めて —インドのアーシュラムで暮らす—

柳田 侃

(甲南大学名誉教授)

### (はじめに)

私は思いがけない機縁で1994年秋から大学での研究・教育に終止符を打ち、南インドにある聖者のアーシュラムに住むことになった。この小論は、そこで生活体験から生まれた感想の断片をまとめたものである。

×                  ×                  ×

日本の経済発展が絶頂を極め、円高が急速に進んで海外旅行がブームを迎えた頃、老後を海外で過ごすことを夢見た人も多かったのではなかろうか。その頃『第二の人生いい処見つけた』などという題名の本が出たのを記憶している。だが、その後バブルが崩壊し、日本経済が構造的な不況に陥ったこと、少子高齢化が急速に進んで、高齢者の福祉・保障が危うくなってきたことなどから、一時のような「優雅な老後」を考える人は少なくなったようだ。

しかし一方、人の寿命が伸び高齢化が進めば、これまでの生き方つまり「第一の人生」とは異なった「第二の人生」を想い描く人が増えるのは至極当然である。もともと人間は他の生物とくらべて後生殖期（ポスト生殖期）の長いのが特徴といわれるが、このポスト生殖期がいっそう長くなった現在、子育てを終え家族を養う義務から解放された人びとは、より「人間らしい」生き方を求めるようになるだろう。その中味は人によってさまざまであるが、「第二の人生」がより多様で豊かなものになり、なかにはそれを海外で、と考える人があっても不思議ではない。

私がインドに住むことになった動機のひとつに、このような新しい生き方を求める気持ちがあったことは否定できない。ここでは、そのさい念頭にあった古代インド人の人生モデル（アーシュラマ）について述べてみたい。

最もよく知られているアーシュラマ法は、人生全体を四分節するものである。すなわち、(1)学道者（プラフマチャーリン）、(2)家住者（グリハスタ）、(3)林棲者（ヴァーナプラスター）、(4)遍歴者（サンニャーシン）の四つであり、(3)と(4)を老後期として

まとめることもできる。人はこのそれを順次に経過して人生を全うするのが正統的な生き方とされる。つまり、幼少期に学問修行に励み大人となる準備をした者が結婚して子を生み家庭をもって社会的義務を果たす。これを終えた者が人生の課題を解くための修業に入り、生死を超える道に進む、というのである。これはインド人といつても主としてバラモンの生き方のモデルであり、また現在どの程度の人がこの法に従っているかは定かでないが、今でもこれが理想としてインド人の精神構造を規定し、これに従った生き方をしている人が多数いることを私は見聞してきた。

私が生活しているアーチュラムは、南インド有数のシヴァ大寺院があり、シヴァそれ自身と言われる聖山のある聖地・巡礼地にあるから、解脱を求めて現世を放棄したいわゆるサードゥと呼ばれる人びとと毎日顔を合わせることができる。その多くは、さきにあげた人生の老後期にあるサンニャーシン（いわゆる遊行者）であるが、なかには家住者をとび越してサンニャーシンになった若い修行者もいる。彼等は黄土色の衣を身に着け、防寒用の衣類や寝具を入れた大きな袋を肩に掛け、食物や水を入れる金属容器を提げ、杖を持ち、背筋をピンと伸ばして同伴者をもたず独りで歩いているのが特徴である。定住地をもたず、夜は寺院やアーチュラムのような公共物や商店の軒下で眠る。

彼らは世俗の生活を放棄している人びとであるから自ら労働することではなく、その衣食はもっぱら乞食（こづけ）一財施によってなりたっており、その点で托鉢の外に作務による自給自足の生活を営む禪僧や修道院の生活などとは異なる。これはインドの修行者の特徴ではなかろうか。アーチュラムやマト（僧院）は修行者のために宿所や食物を提供する役割を果たしているが、宿泊者以外のサードゥや貧困者に食事を与えるところが多い（私のいるアーチュラムでは、毎日11時から“ナラヤナ・セーヴァ”がある）。近代的な生活様式に馴れた私たちの眼には、このサードゥやサンニャーシンたちの強靭な精神力は驚嘆すべきものに思えるが、それは日本人の想像の及ばないものであろう。しかし他面、今日の日本の高齢化社会の中での福祉・保障が、とどのつまり高齢者の自立心なしには成り立ちえないことを考へると、私たちはこのインドの老人の生き方から学ぶべきものがあるのではなかろうか。この点で私が一昨年北インド、ハルドワールで見た光景は、高齢化社会の一つのあり方を示唆するように思われた。

その名の示すように、ハルドワールは「神の門」でありインド屈指の聖地である。私はその中心ハル・キ・パイラから少しガンガ（ガンジス河）を遡ったところにある小さなアーチュラムに滞在したのだが、このアーチュラムの隣には大きな老人専門のアーチュラムがあり、鐘の合図と共に多くの老人が食事をする光景が見られた。この

あたりのガンガの堤防を隔てた通りには多くのアーシュラムや寺院が軒を連ねており、道行く人の殆どが黄土色の衣を着けた人びとであった。彼らは日々ガンガで沐浴し、水につかってジャパをしたり、岩の上で瞑想に耽ったりしていた。なかには、今しがた大企業か高級官僚を退職したばかりかと思われる立派な身なりのサンニャーシンもある。入居者募集のサインボードのある建築中のアパートの名は“サードゥ・ヴィラ”であった。ここでは、毎日のように、どこかのアーシュラムや寺院がサードゥたちのために食事を提供するので、彼らの生活の糧は保証されている。なかには、食事をとらず果物だけしか受け取らないという人もいる。アーシュラムの人びとや宿泊者は彼らを聖者にたいするように丁重にもてなし、彼らが食事をとるのをじっと見守っていた。

このハルドワールでの2週間の滞在は、私にとってかけがえのない貴重なものであり、心の洗われる日々であった。それは私個人に老後の生き方を示唆するものであると同時に、いつか訪れるであろうインドの高齢化社会のモデルを見るような気がした。そして、そこには日本の高齢化社会に欠けている何ものかがあるのではないだろうか。



## 平和と人権の世紀に向けて —インドの哲人に学ぶ—

徳田 一彦

(関西日印文化協会会員)

現在の日本で、皮膚の色の違いによってグリーン車から引きずり降ろされたとしたら、人は激怒し、マスコミも人権無視と叫ぶでしょう。

インド社会で格式も地位もあるガンディーが南アフリカ滞在中に受けた差別の様態は<sup>(1)</sup>、当時のインドが大英帝国の植民地支配下であったということだけでなく、白人優位の偏見で有色人種を蔑視するという、人種差別の最たるものであり、マンデラ大統領の闘争と軌を一にするものであったと言えましょう。

ガンディーが狂信的ヒンドゥー教徒ゴードセーの凶弾によって78歳の生涯を閉じて50年にあたる本年は、『世界人権宣言』が採択されて50年の節目にあたっています。

大量殺戮の第2次世界大戦の原因が、人権無視にその淵源を発しているとの識者の猛省から提起された、「人間の尊厳・人権の尊重と平等意識の啓蒙」を世界平和の思想的基盤として構築しようという、人類の叡智の集積を形骸化させてはならないと思います。

不幸にも昨年わが街・神戸で発生した少年少女殺傷事件が、少年による残忍な犯罪であると判ったとき、私たちは慄然としましたが、これは、少子化社会・メディア社会へと変貌していく多様な環境のなかで、青少年の胸奥に生命軽視・人権無視・弱者蔑視の恐るべき病根が潜在化していることを表出させた、悲しむべき事件でした。それはまた、高度情報化社会、高学歴志向・塾社会・偏差値教育・輪切り教育といった教育現場のあり方を含め、現在に生きる大人と子どもが、改めて自分自身を見つめ直し、問題の本質に迫り、温もりのある、大人と子どもの“対話の重要性”と“人間の生命の尊さ”を再認識しなければならないという緊急課題の提起の場でもありました。

「暴力と動乱と戦争の世紀」といわれる20世紀、その世紀末を指呼の間に数える今日。ガンディーの精神的遺産を継承し、タゴールの平和の叫び、——特に「軍国主

義を進めるなら日本は間違った方向へ行ってしまう！」と、日本の国家主義・軍国主義への警鐘を乱打した勇気ある発言——を、人間尊重の叫びを、私たち一人ひとりが生命（いのち）の奥底に、人間精神の核（ア）として屹立し、来るべき21世紀を「非暴力・共生・平和と人権の世紀」へと転じていく地道な努力を、個々人が本気になってなし遂げるべき時機が到来していると思うのです。

3年前、予想だにしなかった阪神淡路大震災のとき、全国から多大の救援物資を受けるなか、微力ながら私もボランティアとして支援活動にあたらせていただき、多くの方々に奉仕できる機会を得ましたことが、生涯の貴重な体験として鮮彩に蘇って参ります。在神戸インド人のKさん、宝塚市在住で貿易商のBさんもこの大地震で甚大を被害を被られました。しかしお二人は、筆舌に尽くせぬ辛酸を乗り越えて雄々しく立ち上がり、他人（である日本人びと）のために社会貢献をしておられます。ご両人の健気なお姿を垣間見るとき、日本の公僕といわれる人びとのなかに、ほんの一握りとはいえ、本来のパブリック・サーバントとしての使命と責務を忘れ、自己の蓄財に励み、他者への慈愛や奉仕の精神を忘却した人びとの存在が顕在化してきたことを憂えるのは、私一人ではないと思うのです。

高学歴取得——>一流企業・官庁への就職——>高収入・社会的地位の確保——>物質的豊かさの収受=幸福の確保？という構図の裏に、拝金主義・お金万能の価値観が見え隠れします。清貧のみを是とはしませんが21世紀を担う子ども達に、国際化・ボーダレス化時代に突入して久しい今日、多様な価値が存在すること、多様な価値と個性を認め合う教育、個性を育む教育内容を提示してもいいのではないでしょうか？お互いがお互いを尊重していく、互恵の精神、豊かな感性と寛容の精神を育む人間教育を、教育の原点として捉えることが今こそ最大の急務となっていると思えてなりません。

1998年10月、2百余年の伝統を誇るインドのアジア協会が、第1回の『タゴール平和賞』を池田大作SGI会長に贈られました。東洋学研究の世界的高峰に聳える同協会が、その授賞理由を、「平和に向けて人類の和合を促進するための創造的な貢献を果たされたことに鑑みて決定」と、されています。

かつて、インド文化国際アカデミー理事長ロケッシュ・チャンドラ氏、ガンディー記念館館長N・ラダクリシュナン博士らも、今までの池田SGI会長の哲学性と実践力を正視眼をもって高く評価されて<sup>(2)</sup>おられましたが、このたび改めて、見るべ

き人は、多様化する価値観のなかでも物事をしっかりと判断しておられるものだと、つくづく現代インドの知性を見直した次第です。

大正5年（1916年），タゴールは日本訪問に際し、いくつかの演説をされました。大詩人であり、大思想家・哲学者でもある氏の胸奥の生命の叫びを、日本国指導者たちは真摯に傾聴することをせず、これを無視し続けました。軍国主義日本の末路は衰れでした。敗戦、そして戦後半世紀、人智を尽くした技術革新と勤勉さで世界に誇る経済水準に到達したのも束の間、タゴールの発言から80年を経た今日、日本は再び、我欲多き指導者の出現で、バブルの崩壊により混迷の一途を走る無節操大国となっています。

一方、東洋の大國インドは、パール判事の極東軍事裁判に見られる寛容の精神と叡智の輝きをもって、イギリス植民地としての屈辱から独立を勝ち取り、国内的には種々の問題を内包しているとはいえ、ナラヤナン大統領、グジュラール首相のもと、9億余の民衆を蘇させようと堅実な地歩を固めています。

精神の大國インド——その悠久の大地に育まれた民衆の価値観は多様であり、深淵であります。リアルタイムのなかで管理され、息詰まる生活を強いられる日本社会と比較するのは無理かも知れませんが、敢えて言えば、子どもや他人を一元的な短絡的尺度で評価せず、長いスパンをもって、もっと大きなスケールで物事を評価・判断させていく視点と度量とを、われわれはインドに謙虚に学ばねばならないと思うのです。

1994年10月、八王子市の東京富士美術館で開催された『アショカ・ガンジー・ネルー展——癒しの手』を鑑賞、インドに包摂される非暴力の系譜を、時系列的、社会的、政治的変遷の過程を展示を通して体系的に学ばせていただきましたが、限られた地域でのサティアグラハ（非暴力）とはいえ、いくつもの成功事例を積み重ね、民衆にインド独立へ対話と教育を施し、共戦・共生したガンディーの不撓不屈の精神は、20世紀前半の精神闘争史に不滅の輝きをもって私たちに迫って参ります。

インド共和国成立50周年の年、関西日印文化協会は、桑原泰業会長のもと、各界の有識者のご尽力のもと40年の輝かして歩みを遂げて来られました。今日。私自身も蝸牛（がつり）の動きのようではありますが、身近なところからインドの先哲に学び、勇気ある市井の人として、今後の後半生を生きたいと思う昨今であります。

注1) ガンディー著、蠟山芳郎訳『ガンディー自伝』（中公文庫） 1998.2.11記す。

注2) N・ラダクリシュナン著、栗原淑江訳『偉大なる魂』（鳳書院）



## インドにおける 伝統藝術の継承

高木 由紀

(インドシタール研究家)

私は NEW DELHI の KENDRIYA HINDI SANSTHAN というところで 1997 年 8 月から 1998 年 4 月までの Hindi のコースで学びました。Hindi に触れたことのなかった私が、Hindi を学び始めたのは、旅行で初めて渡印した時のインドの子供との出会いが原因でした。小さなお友達とのコミュニケーションの手段として学び始めた Hindi でしたが、結果として多くのことを学ぶこととなり、私に多くの可能性を与えてくれることとなりました。その 1 つがシタールとの出会いでした。“シタールという楽器は北インド古典音楽の演奏で使われる弦楽器”、そして“著名な音楽家・シターリストにラヴィ・シャンカールという人がいる”、この程度の知識しかなかった私がシタールに心惹かれたのはその神秘的な音色はさることながら、その音色が感じさせる独特の雰囲気であったように思います。私はその音色を耳にする時いつもインドへ旅立ちたい衝動に駆られました。私の心は深くその音色に吸い込まれるままにいつも何処かへ旅をしていたような気さえします。

シタールは北インドにおいて古くから宮廷音楽の中で栄えた弦楽器で、その語源は 3 弦を意味するペルシア語“セタール”からきているとされています。原形はその名の通り 3 本弦だったものが、アミール・フスローが改良に手を加えて以来、今日に至るまでの多くの人々によって改良が重ねられ現在の形に到ったと言われています。

一つの楽曲はアーラープ (Alaap) とガット (Gat) から構成されており、①Allap ②Johr ③Idla ④Vilanbit ⑤Tana ⑥Jola ⑦Dhurut Gat ⑧Jola ⑨Tihai と演奏されていきます。タブラの演奏が始まるのはこの ④Vilanbit からで一定のリズムに合わせてサムが合うようにタブラとの調子を合わせます。

インド音楽にはターラと呼ばれる拍節法があり、一つの拍の単位はマトラーと言われ、このマトラーの数によってターラは構成されます。今日ヒンドゥースターニー音楽で最もよく使われるティン・タールは 16 のマトラーからなり、その 1 つの周期

が何度も繰り返されます。ターラ周期の1拍目はサムと呼ばれ、サムからサムまでの1周期をアーヴァルタと呼び、周期の始まりを示すサムはターラ周期の中で最も強い拍で示され、この拍で終わりを告げなければなりません。一つの楽曲の演奏は、ラーガと呼ばれるその楽曲を通して繰り返される曲節・旋律の規則とターラと呼ばれる拍子の規則を逸脱することはありませんが、あらかじめ作曲された形式を基に各演奏者によって Improvisation (即興音楽) がおこなわれることが多く、同じラーガの演奏でも演奏者によってその趣は異なったものとなります。Improvise の施されたリズムのなかでサムに到達させるためにはマトラーを計算しながら演奏せねばならず、即興演奏の錯綜したリズムの中でいかに美しくサムで終わらせることができるかはその演奏家の技量であり、音楽的に美しくサムに到達したときは賞賛に値するシーンとなります。

また、シタールを始めて私が最も驚いたことは西洋音楽で使われるような楽譜が存在しないことでした。西洋音楽が五線譜で示されるのに対し、インド音楽では記譜法が発達していません。けれども西洋のド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドに相当するものは存在し、Sa・Re・Ga・Ma・Pa・Da・Ni・Sa と表記されるその音階理論が西洋のそれとは異なっています。インド音楽では1つの楽曲を演奏するのに楽譜にあたるものは存在するけれども、それは音の再現を記すということではなく、その楽曲の音の繋がりやイメージが頭の中でひろがるようになっており、それがなければそれを基に演奏することも困難なのです。シタールの場合、一度演奏した楽曲を正確に再現するのはほぼ不可能だという所以はこのあたりにあるように思われます。

先程示したインド音楽における音階はそれぞれ意味や性格を持ち、その音の組み合わせによってラサ（情感）を表現しています。いくつかを除いて全てのラーガにこれらの音階の全てが含まれているわけではなく、それぞれのラーガは音階の中からいくつかが選択されます、つまり用いられる音が限定されているわけです。例えば、私が初めて師から教わったラーガはラーガ・ヤマンでしたが、夜に演奏されるべきラーガで、このラーガの Ascending は N・R・G・M・D・N・S (ニ・レ・ミ・ファ#・ラ・シ・ド)、Descending は S・N・D・P・M・G・R・S (ド・シ・ラ・ソ・ファ#・ミ・レ・ド) となり、この音階の組み合わせによってそのラーガがラーガ・ヤマンであると特徴づけられているのです。全てのラーガが演奏されるべき時間帯や季節を持っているというのは、こういったことが関係しているのだと思われます。

現代の古典音楽にはガラナ、つまり流派が存在します。ガラナは18世紀以降に形成されたものでガラナの起源は声楽が中心でしたが、本来声楽の伴奏でしかなかった楽器のいくつかは改良によって進歩を遂げ、それ自身のガラナをもつようになったのです。自分がどの流派に属するかは自らのグルジー（師）がどの流派に属しているのかで決まります。私のグルジーはイムダット・カーニというガラナに属しており、必然的に私のガラナもイムダット・カーニということになります。ラヴィ・シャンカルに双璧をなすといわれる同じくシタールの巨匠、ヴィラヤット・カーンの名で知られるこのガラナは声を模倣し、歌うように奏でるというのが特徴です。またこのガラナの特徴はミンドを多く使うことにもあり、ミンドを使ってストロークを少なくするため、歌っているように奏でるという特徴が認められるのです。

まだまだ世襲制の強いインドの古典音楽ですが、宮廷だけで楽しめられた頃に比べ、私のような異国からの訪問者でも気軽に学べ、広く民衆の楽しめるものとなつたことは確かな発展です。それは私がシタールを持って歩いている時に「私もシタールを習いたいのだけど…。」と何度も話しかけられました。しかし、演奏会のインヴィテーションカードを限られた人以外が入手するのは困難であるという状況から考えると、まだ古典音楽の世界は限られた人が興じるものだということも決して否めません。

最近、アメリカで Shujaat Husaain Khan, Kyahan Kalhor, Swapan Chaudhuri の3人による GHAZAL: Lost Songs of the Silk Road という題名のCDが発売されました。これはシタール、タブラそしてリュートで構成されており、インドとペルシアの音楽をミックスさせたようなのですが、発売以来、大反響を呼びました。これは古典音楽ですが、最近ではポピュラー音楽にシタールを初め多くの楽器や音楽が使用されることも珍しくありません。音楽の形態を問わず、これらの音色が言葉や国境を越えて多くの人の耳に届き、多くの人がそれによって癒されたり、励まされたりすることを願って、これからも私のシタールが奏でられるよう練習に励まなくてはいけません。

#### 参考文献

- ・『インド音楽序説』 B・Cデーヴァ著 中川博志訳 東方出版 1994/8
- ・『インド音楽との対話』 田森雅一著 青弓社 1990/10
- ・『インドの音楽』 H・A・ポプレイ著 関鼎訳 1966/12
- ・『南アジアを知る辞典』 平凡社 1992/10



## (続) インド人移民社会の歴史と現状

—横浜・神戸・沖縄—

富永智津子

(宮城学院女子大学教授)

### はじめに

現在、民族的故郷を離れて生活している人々の数は、1億人を越えているという。物と金と情報に続き、人の移動の「自由化」の時代の到来である。こうした人の移動にかかる「移民」研究は、あらゆる専門領域にかかるすぐれて学際的な分野として、これまで多くの問題を提起し、また、提示しつつある。

筆者は、『日印文化』創立35周年記念特集号（平成6年発行）に「インド人移民社会の歴史と現状－横浜・東京・神戸・沖縄－」と題する小論を掲載した。そこでは、1989年から1992年に行った聞き取り調査のデータにもとづいて、在日インド人社会の歴史と現状を報告した。

今回は、その後のインド人社会の追跡調査を行うとともに、そうした社会を支えている女性にも焦点をあて、インドとは異なる日本の社会の中で彼女たちが何を考え、どのような生き方を選択しているのかを聞いた<sup>1)</sup>。

### I 横浜のインド人

インタビュー 1997.6.8

関内駅から徒歩で数分、久し振りに横浜スタジアムに近いM氏宅を訪れた。こじんまりとしたマンションの三階。ヒンドゥーの神々を祭った小さな祭壇のある小奇麗な居間で、M氏からは「横浜インド商人協会」のその後について、M氏の長男の嫁にあたるマヤ（仮名）には、彼女自身の家族史を語ってもらった。また、前回の聞き取りを補足する形で、さらなるM氏の移民人生の一端にも触れることができた。

## 横浜インド商人協会 (Indian Merchant Association of Yokohama)

1921年に社団法人として設立された「横浜インド商人協会」は、1991年の時点で24社が加盟していたが、現在は18社に減少している。6年間に6社が撤退したことになる。いずれも、日本経済の不況のあおりを受けての撤退であった。顧客が減少して閉店に追い込まれたサリー専門店もあれば、東南アジアや中国の製品に押され、インドでの市場を失って撤退した輸出業者もあったという。

現在のメンバーのほとんどは、カシオ、ナショナル、マツシタ、アイワといった日本の家電メーカーと提携してパーツを輸出している。M氏も、デリー在住の息子の一人をエイジェントとしてさまざまな家電製品や自動車のパーツをインドに輸出している。例外は、インドからの衣料品輸入を生業としているメンバーである。彼は、10年ほど前に沖縄から移住し、もともと沖縄で行っていた輸入業を引き継いでいる。

ところで、ここ数年の変化として、日本人との結婚が増えたことをM氏は指摘する。インド人の妻と離婚して日本女性と再婚した人や、日本国籍を取得したメンバーも出てきた。特に移民第二世代に、アメリカやカナダの大学を終えて日本で就職し、日本人の女性と結婚する者が、すこしづつ増えてきている。彼らは、少なくともインドには帰りたくないと思っている。

こうした現実に直面し、インド国籍を加盟の基礎資格にしてきた協会は、最近規約の改正を行った。すなわち、民族的な出自がインドであれば国籍は問わないことにしたのである。

横浜インド商人協会は、山下町に113坪の土地とそこに建てられた2階建の事務所を資産として所有している。老朽化した事務所の将来計画に関して、すでに1991年には協会内部でさまざまな議論が進行していたが、2年ほど前、ついに建物が取り壊され、新築工事がはじまった。

この改築工事に伴い、そこで行われていたさまざまな祭事は、セント・モーア・インターナショナル・スクールや、個人の私邸を臨時会場として執り行われている。こうした催しの中で年ごとに活発になっているのが、サイ・ババ<sup>2)</sup>の集会である。日本人も20数名が参加している。集会は、木曜日と日曜日に開かれており、木曜日にはインド人が10数名と日本人数名、日曜日はインド人数名と日本人20数名の参会者がある。

日本人の中では女性が10数名、男性が10名以内とのことであった。

### 移民社会の女性—マヤさん（仮名）の事例

マヤさんは、パキスタンのシンド州出身である。父親はカラチ、母親はハイデラバードで生まれた。ともにシンディー・コミュニティに属している。二人は、1946年に結婚し、すぐに西アフリカのシェラレオネに渡った。というのは、父親は、1943年頃、シェラレオネの首都フリータウンに拠点を持つインド系企業チャララム・カンパニーに1年契約で雇われてアフリカに渡り、以来、フリータウンでビジネスチャンスを模索していたからである。帰国は、結婚のための一時的なものだった。

1946年といえば、印パ分離独立の前年にあたる。結婚後、アフリカへと旅立ったマヤさんの両親は、かろうじて独立直後の混乱に巻き込まれずに済んだということになる。

父親は、フリータウンでさまざまなビジネスを手がけた。たとえば、雑貨店を経営したり、製縫工場を設立したり、建設会社を興したり……。しかし、最終的に、香港や中国からの雑貨の輸入業に落ち着いた。卸業のみで、小売はしていなかったという。二人がもうけた子供は一男四女。1952年に生まれたマヤさんは、次女にあたる。

フリータウンでの生活は、まるで王侯貴族のようだったと、マヤさんは語る。自動車を何台も所有し、大きな家に住んでいた。ところが、父親の突然の死によって、マヤさん一家の生活は、大きな転換を余儀なくされることになる。事の次第は以下のとおりである。

1971年、マヤさんの母親は、子供たちを連れムンバイ（ボンベイ）の親戚を訪問するためインドに一時帰国をする。ところが、翌年、商用で海外にてていた父親が、飛行機の中で心臓疾患のため急死。母親は、インドになじめず滞在一ヶ月でシェラレオネにもどった長男を除き、4人の娘とともにそのままムンバイに腰を落ち着けることを決意したのである。マヤさんが19才の時のことだった。

生活費には、父親の生命保険金や遺産をあてた。シェラレオネで育ち、シェラレオネで高校を終えていたマヤさんは、英語で育ったため、ヒンドゥー語の読み書きがで

きない。したがって、ムンバイの大学には入れず、ビジネス・スクールで秘書と会計士の資格を取得して、1974年から1年間シャンティ・プラスターズで働いたのち、1975年から結婚するまでの9年間は、輸出関連の会社で秘書をしていた。

結婚は、1984年。相手は、すでに日本に移住していたM氏の長男である。同じシンディ・コミュニティの知人の紹介で見合いをして決めた。結婚までに夫と会った回数は2回。結婚して一ヶ月後には、日本にやってきた。当初は、知人もなく、寒くて、淋しくて、本当に辛かった。2年後、長男が生まれ、次第に日本の生活にも慣れた。義父と夫の仕事の手伝いをしながら、インド人や日本人の友人も出来、今は日本での生活に適応している。

将来の展望は、すべてひとり息子の長男にかかっている。日本に永住するかどうかも、息子次第である。今、はっきりしていることは、息子がインターナショナル・スクールの高校を終えるまでは日本を離れない、ということだけである。その後の高等教育をどこで受けるかは、息子次第である。彼の結婚について言えば、同じシンディ・コミュニティの女性が望ましい、と思っている。価値観や習慣が共有できるからである。しかし、これは親の意見であって、いずれ、息子が自分で決めるだろう。

日本の生活に不満はないが、強いて言えば、母親と離れていることがいつも気掛かりなのと、メイドを使えないことに不便を感じている。

### M氏の移民人生

1916年、パキスタンシンド州のハイデラバードで生まれたM氏は、今年81才。印パ分離独立の際にインドのバンガロールに移住、その後ニューデリーに移ったものの、生活は苦しく、4人の子供に教育を受けさせるために、止むなく家族を残して出稼ぎに出た。1952年のことだった。

出稼ぎ先は横浜。2年ほど働いて、一旦帰国したが、1957年に再び横浜にやってきた。以来、1972年に長男をインドから呼び寄せるまで、単身で貿易会社を経営していた。1984年には、長男に嫁をインドから迎え、孫にも恵まれた。

ちょうどその頃、ニューデリーで留守を守っていた妻も、すべての子供が巣立ち、育児から解放された。こうして、ようやく、妻を日本に呼び寄せる状況が整うことに

なる。ところが、日本にやってきた妻は、半年もせずに病に倒れ、帰国してしまった。日本の寒さに耐えられなかったのだ。インドに帰国後まもなく、妻は死亡。そして、つい先頃、長女にも先立たれた。昨年、久しぶりの帰郷の折り、アーメダバードの長女の家に3週間滞在できたのが、せめてものなぐさめとなっている、とM氏は語る。

家族と離れて暮した40年に及ぶ日本での生活は、M氏にとって何だったのか。M氏は、このぶしつけな私の質問に、2年ほど前に患った脳梗塞の後遺症でしびれの残る脛をいたわりながら、自分に語りかけるかのように、その胸中を吐露した。

「単身で出稼ぎに来ている人は、わたしだけではない。しかし、中には、ガールフレンドを持って適当に楽しんでいる人もいた。だが、わたしは、そういうことは一度もしなかった。

一緒に住むべき妻と別々に暮すことは、つらい。当たり前でしょう。淋しさともどかしさ・・・。妻の方も同じ思いだったと思う。

でも、仕方なかった。インドでの稼ぎでは、子供たちに高等教育を受けさせることはできなかったから。

今のわたしは、生ける死者のようなものだ。健康を失ったら、生きている価値はない。嫁であろうと、息子であろうと、他人に依存しながら生きるほどつらいことはない。わたしは、最後まで自分のことは自分でやっていきたい。

これまで、充分息子たちの面倒をみたのだから、今度は息子たちが世話をしてくれる、と言う人もいるが、わたしはわたしの義務を果たしただけ。そのことをどう考えるかは、彼らの問題であって、わたしが判断することではない。それに、今更インドに戻るつもりはない。財産は、すべて日本にあるし、40年も離れているとインドは、もう外国。生活の拠点は、日本以外にはない。

ヒンドゥー教の教えは信じているし、信頼している。しかし、それは、精神的な支えにはなっても、現実に肉体の衰えを食い止めてはくれない。肉体の衰えによって、自立した生活ができなくなることを、今は一番恐れている。この足のしびれ・・・西洋医学は、こうした24時間絶えることなく続く苦しみを取り除いてはくれない。」

このM氏の述懐に、わたしは彼の息子夫婦といっしょに耳を傾けていた。息子夫婦の胸中を、わたしは尋ねることができなかった。隣室からは、孫がひとりでファミコンをしている。幼稚園ぐらいまでは、近所の子供と遊んでいたが、成長するにつれ、日本人の友達はいなくなったという。

わたしは、秋にはまたわたしの住む仙台の新米を味わってもらいたいと心に念じながらM氏の家を後にした。外に出ると、横浜スタジアムをとりまく界隈は、すでに夕闇に包まれていた。

#### 注

- 1) 次表は、1987年と1997年の在日インド人総数、および主要都府県別人数である。

主要都府県における在日インド人人数

	総数	兵庫県	大阪府	東京都	神奈川	沖縄
1987年	2,585	931	143	778	142	166
1997年	7,478	1,066	319	2,382	714	150

(出典) 法務省『在留外国人統計』1987年、1997年

- 2) 「サイ・巴巴」は、1926年に南インドに生まれ、1940年に、聖人サイ・巴巴(シュリ・シルディ・サイババのこと。1918年没)の生まれ変わりを宣言、多くの信者を集めはじめた。1950年にはバンガロール近郊のプッタパルティに本部を設立。60年ころから、自らをシヴァ神の化身、次いで〈普遍なる神〉を自称した。信者たちはカリスマ的存在である彼の指導の下に一種のヨーガを行う。その数は、世界各地にある約1,500ヵ所のセンターに数千万人の信者を擁するといわれている。

『南アジアを知る事典』平凡社参照、ただし、数値は比良竜虎氏の情報による)。

なお、サティア・サイ・オーガニゼーション・ジャパン出版部(目黒区東山1-

30-8) 発行のパンフレット『シリ・サティア・サイババ』(1992年)によれば、日本への導入は、「1975年、J.T.クブチャンダニとブラザー・ラム・チュガニが神戸で初めてバジヤンを始めた」ことに由来する。その後、1979年に「サティア・サイ神戸センター」が発足、1980年には、東京センターが設立されている。「シリ・サティア・サイ日本支部」の発足は、1981年である。現在、神戸、東京の他、札幌、千葉、横浜、浜松、大阪、倉敷、沖縄にセンターが、帯広、新潟、武蔵野、長野、金沢、静岡、名古屋、京都、岩国、広島、香川、北九州、福岡にグループが存在している。

センターの活動は、バジヤン（神への讃歌）とセヴァ（奉仕活動）を二本柱としている。筆者は、1998年3月31日、東京センターのバジヤンに参加、その際、同センターの婦人部副会長Sさん（日本人）に面談し、以下の報告を得た。

- ① Sさんが、東京センターのバジヤンに参加するようになったのは、1992年。当時は、木曜日と日曜日にバジヤンが行われ、毎回30-40人ほどの参加者があった。参加者の急増は1994年。この年、雑誌やテレビでサイババ関連の記事や特集が相次ぎ、関心を持った人々が集まってきたからである。バジヤンの回数も増えて、週4回開かれるようになった（火、木、土、日）。参加者は毎回100人を越え、ラーマや釈迦の生誕祭などには、250人以上の参会者があったという。現在は、多い時で100-150人程度を維持している。筆者が参加したこの日は、婦人部主催のバジヤンで火曜日の午後という時間帯のせいもあり、女性が25人、男性10人であった（すべて日本人）。
- ② 東京センターに置かれている出版部からは、サイババ関連の図書が37冊（内英語6冊）、カセットテープ5本、コンパクトディスク2枚、ビデオ3本の他、ニュースレター『サイラムニュース』が年6回発行されている。  
この『サイラムニュース』は、現在59号まで発行されており、購読料は年間2,000円。一時期5,000人を越えていた購読者は、現在3,000人ほどになっているという。
- ③ 同センターへの参加者は、ほぼ全員が日本人である。年齢層は、比較的若い。
- ④ センターは、ボランティアによって運営され、会場は、信者によって提供されている。センターへの入会金はなく、会費もなし、寄付の義務もない。

筆者は、以上の体験を通して、バジヤンへの参加者が日本人であること、センターも日本人が中心となって運営されていることに関心をもった。日本におけるインド人社会の形成と展開を、日本人とインド的な文化との接点という観点から見ると、サイ・センターは、その重要な拠点となっているようと思われる所以である。

なお、東京センターでの聞き取りや資料提供は、比良竜虎氏の好意によるものである。

記して感謝の意を表したい。

## II 神戸・大阪のインド人社会

### 人の移動・会社の動き

1987年から1997年にいたる10年間の阪神インド人社会の推移を、インド商業会議所 (The Indian Chamber of Commerce-Japan, 1937年設立) とインド・クラブ (The India Club, 1904年設立) の名簿を比較検討することによって追跡したのが本筋である。神戸を舞台に活動している真珠業者は、インド・クラブの中心的メンバーを構成しており、それ以外の貿易業者は、ほぼ全員がインド商業会議所に所属していることから、このふたつの名簿の比較によって、阪神インド人社会のおよその動きを知ることができると考える。

#### (1) インド商業会議所の会員名簿から

名簿には会員名簿と会社名簿が組まれている。表1は、会員数と会社数の総計である。会員に関しては居住地別、会社に関しては会社の所在地別に整理した。

表1は、まず第一に、1987年から10年間に会員数が364人から310人に、会社数は158社から120社に減少したことを示している。つまり、会員は54人、会社は38社の減少である。なお、この減少は、日本経済が低迷期に入った1992年以降の現象であったことが1992/3年度の会議所の名簿から検証できる。つまり、1992/3年度の登録会社数は158社であり<sup>1)</sup>、1987/9年度の水準を維持しているからである。ここ数年間に38社ものの会社数の減少は、阪神インド人社会の歴史にとって大きな変動であったといえ

るだろう。ただし、すぐあとで述べるように撤退した会社実数は、これより多く65社にのぼっている。

第二に注目すべきは、神戸を拠点とした会社数の増加であろう。この背景には、インド人商社18社の共同出資によるITCビル（International Trade Centre Building）が神戸に設立され、大阪からの移転が相次いだことが大きく関係している<sup>2)</sup>。増加数のうち15社は大阪からの移転組であった。しかし、会社は大阪、住居は神戸という従来のパターンが大きく変化したわけではない。

表2は、インド商業会議所正会員の業種とその変動を示している。同会議所の正会員には、東京や沖縄のインド人も参加しているが、ここでは、テーマとの関係から大

表1 インド商業会議所の会員数および会社数（大阪・神戸）

住所／所在地	1987/88年度			1997年度		
	(大阪)	(神戸)	計	(大阪)	(神戸)	計
会員数	36人	329人	364人	30人	280人	310人
会社数	132社	26社	158社	79社	41社	120社

（出典）『インド商業会議所名簿』1987/88年および1997年

阪と神戸に限定した<sup>3)</sup>。括弧内の数値は、1997年の名簿から消えている会社数、鉤括弧内は数値は1987年以降に新規参入した会社数である<sup>4)</sup>。なお、この10年間に業種を変更した会社や、神戸に移転した会社（15社）があり、数値の増減は地域間・業種間にわたっていることを指摘しておきたい。

同表は、以下のことを示している。まず、業種の中では、「織維・雑貨」の輸出入業者が最も多く、「織維・電化製品」、「電化製品」の輸出入業がそれに続いている。この三つの業種で1987/88年度は会社総数の79%，1997年度は同70%を占めた。このうち、1997年度の名簿から消えた会社（経営者の名前も名簿から消えているため、日本から撤退したと思われる会社のみを計上した）は44社にのぼった。この数値は、名簿から消えた会社の総数65社の83%にのぼっている。なかでも、「織維・電化製品」関係の輸出入業者の撤退率は高く、50社中27社（54%）が撤退しているのが注目に値す

る。一方、繊維に特化している業者の撤退率は32%であり、日本の景気低迷が電化製品関係の業者を直撃したことが推察される。新規参入に関しては、大阪が15社、神戸が12社となっている。この中には、マネージャーが独立して会社を設立したと思われる事例が3件、親会社から分離独立したと思われる会社が一例ある。また、数は少ないが、宝石関係の業者と不動産業、およびレストラン業の登場が見られた<sup>5)</sup>。なお、1997年度の神戸を拠点とした会社数の増加には、新規参入とは別に、大阪からの15社の移転が含まれていることはすでに述べたとおりである。

表2 インド商業会議所正会員の業種とその変動（大阪・神戸）

	1987/88年度			1997年度		
	大阪	神戸	計	大阪	神戸	計
繊維・雑貨輸出入業	50(16)	2( 1)	52(17)	38[ 5]	3[ 1]	41[ 6]
繊維・電化製品輸出入業	42(22)	8( 5)	50(27)	20[ 4]	10[ 3]	30[ 7]
電化製品輸出業	19( 6)	4( 2)	23( 8)	6	13[ 4]	19[ 4]
中古車などの輸出入業	14( 6)	2	16( 6)	8[ 1]	3	11[ 1]
貴金属輸入業(宝石)	1	2( 1)	3( 1)	3[ 2]	2[ 1]	5[ 3]
真珠輸出業	0	6( 3)	6( 3)	0	3	3
雑貨輸出入業	5( 3)		5( 3)	1[ 1]	1	2[ 1]
保険業	1		1	1		1
不動産業		1	1		2[ 1]	2[ 1]
食料品輸入業		1	1	2[ 2]	1	3[ 2]
レストラン経営			0		3[ 2]	3[ 2]
計	132(53)	26(12)	158( 6)	79[15]	41[12]	120[27]

(出典)『インド商業会議所名簿』1987/88年度、1997年度

(注) ( ) は、1997年の名簿から消えた会社、[ ] は、1997年度の名簿に新たに登録された会社。ともに母数の中に含まれている。

## (2) インド・クラブの会員名簿より

表3は、インド・クラブの名簿から得られた数値である。1985/6年度の会員数は78名、会社数は73社であり、1997年度はそれぞれ67名、55社となっている<sup>4)</sup>。会員数の減少は11名、会社数の減少は18社である。しかし、括弧で示したように、この数値の背後には35名の会員の脱退と24名の新規加入、28社の脱退と10社の新規参入があった。また、脱退した会員35名のうち7名は息子、あるいは家族のメンバーがかわりに会員になっているため、事実上の脱退者は28名ということになる。また、新会員24名のうち14名（上記の7名を含む）はいずれも旧会員の家族であり、第二世代が後継者として登場してきた様子が伺われる。

ところで、インド・クラブの会員は芦屋と大阪に住居と構えている会員がひとりずついるが、その他はすべて神戸に住んでいる。このパターンは、過去10年間変化していない。ただし、神戸内での住所の変更がかなり見られた。移転した11名のうち、北野町からの移転が2名、山本通りからの移転が6名、中山手通りからの移転が2名、同じ北野町内での移転が1名となっている。阪神大震災のために家屋が破損した結果、移転したと考えてよいだろう。

さて、インド・クラブの会員の業種の特徴は、真珠業者が多いことである。1985/6年度の登録会社73社のうち28社（38%）、1997年度では26社（47%）を真珠業者が占めている<sup>5)</sup>。会員数でみると、1985/6年度では78名中30名（38%）が、1997年度では67名中39名（58%）が真珠業に従事している。これからわかるようにインド・クラブの会員の中で、複数の家族が会員となっているのは真珠業者の中に多い。

なお、1997年度の会員67名中インド商業会議所の正会員となっているのは20名で、そのうち6名が1985/6年度以降の新会員である。この20名のうち真珠業者は2名にすぎない。真珠業者は、インド・クラブを核として神戸を拠点に活動している<sup>6)</sup>。

以上、インド商業会議所およびインド・クラブの名簿を資料としてこの10年間の動向を探ってきたが、問題は、名簿から消えていった人々のその後である。死亡・引退・国内または海外移住を考えられるが、詳細は把握していない。ただし、10年前にインタビューをした人々に中で、後継者がいない老夫婦やひとり暮しの老人は日本を離れていることから、老齢化とともになう動向は容易に推察できよう。重要なのは、経済的な理由での移住である。この点に関しては、今後の課題としたい。

表3 インド・クラブ会員数

	1985/6年度	1997年度
会員数	78名 (35名)	67名 [24名]
会社数	73社 (28社)	55社 [10社]

(出典)『インド・クラブ会員名簿』1985/6年度, 1997年度

(注) 括弧内は、1997年の名簿から消えた会員数および会社数, 鉤括弧内は、その後の10年間に登録された会員数および会社数。ともに母数に含まれている。

### 移民社会の女性

インタビュー 1997.12.14

JR三宮駅に近い、とあるスポーツ・クラブのパーラーである。クリスマスを控え、入口には、ツリーが飾られている。天井の赤い照明が、雰囲気を盛り上げる。

インタビューに応じてくれるのは、シク教徒のRanjit Kaur Sethiさんと、嫁にあたるHarpreet Kaur Sethiさんである。

Sethi家との出会いは、1989年にさかのぼる。インド人社会の現状を知るために、わたしが初めて神戸を訪れた時に紹介されインタビューしたのが、シク社会の最長老であり、インドクラブの会長を勤めたこともあるRanjitさんの夫B.S. Sethi氏であった。真紅のターバンと真っ白い見事なヒゲが印象に残っている。氏は、惜しくも1994年に他界された。

Ranjitさんの長男であるD.S. Sethi氏とは、1994年に日本インド商業会議所の副会頭として、アンケート調査の依頼に応対してくれた時に面識を得た。この時、氏の協力の下に、会議所の全メンバーを対象に行ったアンケート調査は、回収率が3% (11名)という結果に終わり、マクロな動向を把握するための方法を再考させられている。しかし、収穫もあった。アンケートに応じてくれた人の半数以上が、日本人を理解し難しい相手であり、差別的であると感じている、との回答していたことである。絶対数は少ないが、インタビューでは得られない貴重なコメントだった。この点に関する

考察や分析は、今後の課題としたい。

D.S.Sethi氏とは、1997年7月に氏の一家が経営する会社の事務所で再会、マクロな社会調査の方法について相談に乗ってもらった。これに関しては、ディワーリ祭やその他の集会の折りを利用して行うのがよいだろうとのアドバイスを得た。その折りの雑談の中で、氏の会社のビジネスネットワーク（中古車販売）が20か国以上にのぼっていること、その際、顧客とはインターネットを通じての取引するため、国籍や民族はもはや無関係であるとの指摘があった。情報化の進展により、従来の同族ネットワークを通じてのビジネス環境の激変が進行しているのである。ビジネスにもはや「顔」は不要なのだ。また、世代間の相違について、氏は、次のような興味深い見解を持っている。つまり、氏もそのひとりである第二世代は、親の苦労を知つておらず、それなりに日本社会との接点を持つよう努力をしてきたが、第三世代になるとそのような努力をしないため、日本語もはるかに下手である。その背景には、日本社会自体の変化もある。氏の少年時代には、近所の日本人の友達と草野球をしたりサッカーをする機会もあったが、今の子供たちは、家に閉じ籠もってファミコンをしている時間が多く、交流の機会がない、というのである。ちなみに、氏は完璧な日本語を話す。その背景として、氏が指摘するような社会状況の変化に加え、氏の家に雇われていた日本人のメイドの影響が大きかったことが今回の母親とのインタビューで判明した。氏が育てられた頃にはまだ日本人のメイドが手軽に雇えた時代だったのである。

### ① Ranjit Kaur Sethiさん（66歳）の事例

Ranjitさんは、1932年、イランのテヘランで生まれた。なぜ、テヘランなのか。その理由は、父親が商売の拠点を故郷のラワルピンディ（現在パキスタン側のパンジャブ地方）からテヘランに移したからである。したがって、5人の兄弟姉妹（姉1人、兄1人、妹2人、弟1人—兄と弟はすでに他界し、姉はムンバイに、妹2人はニューデリー在住）もすべてテヘランで生まれている。

テヘランで手広く輸出入業を営んでいた父親だが、娘たちの教育はインドで受けさせたいとの意向から、Ranjitさんが12歳の時に、故郷のラワルピンディにもどった。公教育がなかったテヘランでは、家庭教師について読み書きを習うしかなかったからである。

Ranjitさんが、こうして第9学年と第10学年をラワルピンディで終えた翌年、印パ分離独立にともなう紛争が勃発した。Ranjitさんが15歳のときだった。一家は、故郷を棄ててニューデリーに移住した。Ranjitさんは、その後見合いをし、16歳で結婚。相手は、ラクナウ（U.P.州）で運送業を営む一族の男性だった。結婚式の前に一度だけ会ったが、話をしたことはなかったという。

夫は、運送業がはかばかしくないため新しいビジネスチャンスを探していた。その頃、日本が恰好の出稼ぎ場所として人々の噂にのぼっていたこともあり、夫は、友人とふたりで日本を訪れた。1952年のことだった。友人は日本が気に入らずに数ヵ月で帰国したが、夫は、神戸に居を構え、大阪でビジネスに着手した。自動車のスペア・パーツをインドへ輸出するビジネスである。その頃の日本は、入国が容易で、3年の滞在ビザが簡単に入手できたという。

夫は、そのまま日本に滞在することを決意したため、Ranjitさんは、ひとり飛行機で夫の待つ神戸に向かった。夫は、羽田まで迎えにきてくれた。日本についてのイメージは皆無だった。ただ、夫がいるということだけしか念頭になかった。到着したのは2月という寒い季節だったが、清潔な街並みと豊富な物資を見て、すっかり日本が気に入った。1958年に長女が、60年に長男、62年に次男、そして64年には三男が誕生。日本人のメイドを2人雇って子育てに専念した。当時は、メイドが安く雇えたからである。

夫のビジネスは、破産しかけたり、家を売却して資金ぐりをしたりと、さまざまな曲折を経て、現在、3人の息子が継ぎ、一応安定した経営状態が続いている。

子供たちは、Stella Marisというインターナショナルスクールで高校までを終え、3人とも父のビジネスを手伝いはじめた（ひとり、アメリカの大学に留学した息子がいるが、2年ほどで帰国した）。ちなみに、Stella Marisはすでに廃校になって存在しない。高校までのインターナショナルスクールは、現在Canadian AcademyとMarist Brothersがあり、その他、St. Michaelが小学校まで開校している。

夫は、1985年頃から腎臓病を患い、1994年に他界するまで人工透析を続けていた。夫の遺灰は、パンジャブ州の川に流した。

現在の生活の中心は、シク寺院である。シク寺院の日曜集会には必ず出席している。金曜日にも集会があるが、こちらには出席していない。阪神大震災で北野町の家屋が半倒壊し、ケガは免れたが、住むにたえなくなったために売却して、新たに息子たち

の住まいのそばに新築した。現在は、三男一家と一緒に暮している。楽しみは、78人の仲間とカードをすること。

老後は、息子たちに委ねている。息子たちがこのまま日本にとどまれば、日本で一生を終えることになるだろう。娘は、現在アメリカに住んでいる。息子や娘は、すべてシク教徒と結婚している。

## ② Harpreet Kaur Sethiさん（33）の事例

Harpreeetさんはニューデリーで生まれた。結婚は17歳の時だった。夫のD. S. Sethi 氏とは、姻戚関係にある。Sethi氏の父方の祖母と、Harpreeetさんの父方の祖父が兄弟なのである。その関係から、Sethi氏が結婚相手を探しにインドを訪れた時に彼女の家に泊まり、それが結婚へのきっかけとなった。

結婚は1982年末。ニューデリーで式を挙げ、一ヶ月後に日本にやってきた。日本に到着したのは、1983年1月だった。その後、息子が2人生まれた。

8年前から自宅で料理教室を開いている。外国人も日本人もやってくるが、日本人の女性とは、形式的な付き合いを越えて親しくなることはない。友好的ではあるが、何か壁があって、心から打ち解けることがない。文化なのか、それとも、言葉の障壁なのかはわからない。（ちなみに、Harpreeetさんは、日本語での日常会話が可能。）

インドの故郷を訪ねる機会は、1995年に母が交通事故で亡くなつたため少なくなつた。以前は半年に一度は帰国していたが、今は、2・3年に一度程度。ここ神戸がホームタウンだと思っている。

家では、夫と義母とはパンジャブ語で話すが、息子たちとは英語をつかっている。息子たちは、パンジャブ語を聞くことができるが話せないし、書くことはもちろんできない。しかし、心配はしていない。夫も、子供の時は同じだったけれど、20歳になつて意志的にパンジャブ語を学び会得してしまつたからである。日本語も同じで、必要になれば、その限りでの日本語を覚えていく。今は、英語が一番大切だと考えている。

子供たちは、学校教育を通して西欧的な影響を強く受けている。インド文化と西欧文化とのバランスが重要である。それは、子供への愛によって実現できると思っている。愛とは、束縛でなく、独立心を育てる方向にむけての解放でなければならない。

息子たちには、プロフェッショナルな仕事についてほしい。もし、それができなかつたら、父親のビジネスを継げばよい。夫も同じ考え方を持っている。

日本社会では、子供の非行が問題になっている。インドでも状況は同じだ。しかし、神戸のインド人社会では問題となっていない。この違いは、移民社会という小さな社会の保守性にあるといってよい。団結力が良い方に作用しているのではないか。その中核をになっているのがシク寺院である。シク教の教えに従うことは、その価値観を子供に伝えることであり、シク寺院を核としてコミュニティ全体が子供たちの養育に関与していることを意味するのだと言って、Harpreetさんは話を終えた。

## コメント

### ① 「移動の自由」ということについて

今回のサーベイで驚いたことは、この10年間に158社のうち44社が何らかの理由で日本を撤退したと推定される状況である。旧知のインド人も、年老いて、結局は、日本を去った。こうした神戸のインド人社会を見ていると、彼らは「移民」なのか、それとも長期の「出稼ぎ」なのが、時々わからなくなる。というより、こうした設問自体が、もはや意味を持たなくなっている現実があるのかもしれない。つまり、移動の「自由化」である。移動の自由を求める人々からすれば、それは、暮らし安い場所、あるいはよりよい生活の質の向上を追求するために容認さるべき権利であるということになる。神戸のみならず、世界中でこうした価値観が人の移動を促している。「合法」か「非合法」かにかかわらず、である。

一方、国を越えた移動の自由化は、「国民国家」の理念にはそぐわない。なぜなら、移動の自由は、「国民国家」の利害より、個人的利害を優先するという側面を持つからである。しかし、人の移動の自由化は「国際化」のひとつの顔であることも明白である。このことが、「人の移動」に対するスタンスの違いを生み出している。つまり、「国民国家」に価値を置く人々にとって、人の自由な移動は好ましくない。しかし、「国際化」に価値を置く人々にとって、それは人間の「権利」なのである。価値観の違いなるがゆえに、「移民」受入れ派と制限派との距離は、容易には縮まらないだろう。

当面、われわれは、このふたつの価値観を、いかに調整したり、乗り越えたりできるかを考えいかねばならない。その際、民族的故郷を離れて暮らす神戸のインド人たちとは、われわれに、多くのことを考えさせてくれる「教師」なのである。

## ② ビジネスのインターネット化

Sethi氏のコメントから推察されるように、インターネットの普及が、ビジネス環境の変化を促していることが推察される。つまり、インターネットによって「顔」は必要なくなってきたのである。このことは、将来的に、従来のビジネス・パターンであった同族ネットワークへの依存度の低下を予想させる。この現象は、経済活動の変化にとどまらず、世界中に張り巡らされている「移民」の入的なネットワークの縮小につながり、ひいては「移民」の意識を変化させ、それは、彼らの移動、あるいは彼らとホスト社会との関係を変えてゆく契機をも含んでいるよう思われる。

注)

- 1) 藤田誠之祐「神戸を中心とする日印経済交流と在留インド人の動向」『日印文化』創立35周年記念特集号、1994年、42頁。
- 2) 同上、41頁。
- 3) インド商業会議所所属の東京・沖縄所在の会社数は、1987/8年度は21、1997年度が13となっている  
(『インド商業会議所名簿』1987/8年度、および1997年度参照)。
- 4) Canadian AcademyとState Bank of Indiaは、除いた。
- 5) この中には、大阪の繊維関連の会社を閉鎖し、神戸でレストランを開店した事例が含まれる。会議所名簿参照。
- 6) ちなみに、1985/6年度の真珠業者28社中5社が1997年の名簿から消えており、新たに3社が新規参入している。
- 7) 神戸には、インド・クラブの他に「インド社会協会」があり、阪神在住インド人の40%以上を占めるシンディ・コミュニティのメンバーの多くが所属している。最近の協会の名簿が発行されていなかったため、今回の分析には使用していない。なお、真珠業者の多くは、ジャイナ教徒である。ジャーティ（カースト）別のサーバイや在日インド人社会の歴史については、富永智津子「インド人移民社会の歴史と現状－横浜・東京・神戸・沖縄」『日印文化』前掲号参照。なお、香港での調査の折、神戸にシーア派のイスラム教徒であるボホラ一家が戦前より在住していることを知った。

1997年5月15日、7年ぶりに沖縄を訪れた。曇り。気温29度。梅雨時とあって、湿度が高い。沖縄復帰25周年に当たるこの日、那覇市のメインストリートでは、反戦デモや集会が開かれていた。

今回の目的は、この7年間の沖縄インド人社会の変化を調べることと、前回できなかった女性へのインタビューである。まず、前回と同じく「インド人社会協会」会長のバーニー氏にこの7年間の変化を聞いた。バーニー氏は、この間ずっと会長をつとめてきており、インド人社会全体の動静を把握している。

### インド人社会の人的移動

1990年に45を数えた<sup>1)</sup>沖縄市在住のインド人世帯のうち、3世帯が海外へ転出した。一方、神戸からの転入者が1世帯あり、現在、合計43世帯となっている。移動の詳細は、以下の通りである。

- A 夫を亡くして女手で店を経営しながら娘2人を育てていた女性が、香港に移住。長女が香港在住のインド人と結婚し、次女が香港の航空会社に就職したのを機に、沖縄を引き上げた。
- B インド人経営のテーラーとしては老舗の店主が、アシstantを残して、香港に移住。
- C 商店経営が破産し、沖縄を去ったことは分かっているが、移住先は、定かでない。フィリピンに行ったとの噂もある。
- D 神戸からの転入者は、商店の従業員として働いている。

この他、基地の海兵隊に殺されたインド人商店主<sup>2)</sup>と、心筋梗塞で死亡したインド人商店主があり、いずれも息子が店の経営を継いでいる。つまり、過去7年間に死亡したインド人は、2人ということになる。

以上の人的移動は、第一世代の移動である。一方、第二世代にも移動が見られた。移動の原因是結婚である。7年前に訪れた時、バーニー氏の長女が結婚する直前だっ

た。第二世代の中では、初めての結婚だった。彼女を含めて過去7年間に12（女性7、男性5）の結婚件数を数えたという。そのうち、沖縄に居を構えたのは、香港のインド人女性と見合結婚し、父親の商店を継いだ2人の男性のみで、10組は本土か海外に転出した。転出先と、結婚のいきさつは以下の通りである。

- A スペインに留学した男性。当地のインド人女性と恋愛結婚。現在スペインに在住。
- B 香港に留学した男性。当地のインド人女性と恋愛結婚。現在、香港に在住。
- C アメリカ合衆国に留学した男性。アメリカ合衆国在住のインド人女性と恋愛結婚。現在アメリカ合衆国に在住。
- D 岩国在住のインド人男性と恋愛結婚した女性。現在、岩国に在住。
- E インドに留学した女性。当地でモロッコから留学していたインド人男性と恋愛結婚し、現在、モロッコに在住。
- F 姉妹を通じて香港在住のインド人と見合い結婚した女性。現在香港に在住。
- G インドの姉妹を通じてカリブ海のセント・マーティン島のインド人と見合い結婚した女性。現在、セント・マーティン島に在住。
- H 両親が、香港にもビジネス・ネットワークを持っているため、香港に行く機会が多く、その際に知り合ったインド人と恋愛結婚した女性。現在香港に在住。
- I 沖縄出身の母親を持つ女性。沖縄出身の男性と結婚し、現在、本土に在住。
- J 沖縄出身の母親を持つ女性。本土出身の男性と結婚し、現在、本土に在住。

なお、日本人と結婚したIとJを除き、結婚相手は、すべてシンディ・コミュニティの出身者である。

### 教育状況

7年前の聞き取り調査の時、英語で受けられる高等教育機関が少なかった沖縄市に2年コースのビジネス・カレッジが設立されたので、英語でも教育を受けられるようになり、状況は改善されるだろう、とバーニーさんは語っていた。ところが7年後の

状況は、このカレッジの設立によって決して改善されたわけではないという。それは、相変わらず海外に子弟を送り出す世帯が多いことにも現れている。現在、海外で高等教育を受けている子弟は、以下のようになっている。

女子	U S A 香港 ムンバイ	1名 2名 1名
男子	U S A	5名

以上の表から、女子は香港やインドのムンバイの、男子はアメリカ合衆国の高等教育機関に留学される傾向がみられる。留学先で、相手を見つけて結婚するケースが多いことは、すでに見た通りである。教育を受けければ海外で就職先を見つけて沖縄を離れ、そうでない場合には、親の跡を継いで沖縄の商店経営に従事する傾向がある、とバーニーさんは分析する。

### 経済状況

日本経済の不況、なかんずく沖縄経済の低迷状況は、インド人社会をも直撃した。このところ多少円安になったとはいえ、長く続いた円高の影響から、主な顧客だったアメリカ兵の家族の購買力がさらに低下し、基地への依存体質からの脱却が、切実な課題となっている。実際、7年前、75%だったアメリカ人の顧客はますます減少し、現在、その比率は50%を切っているという。その代わりに増えてきたのが、沖縄人の顧客である。店に置く品物も、沖縄の若者向けに、Tシャツなどをインドから仕入れて対応している。

しかし、それによって、従来並みの収益を見込むのは難しく、1995年から、沖縄在住商人の約半数が、コミッショナ・エイジェントの仕事を始めたという。コミッショナ・エイジェントとは、手数料をとって商売の仲介をする業者のことである。会社組織になると、いわゆる「商社」ということになろうか。私が長年にわたって調査研究してきた19世紀の東アフリカやオマーン在住のインド人商人の中には、個人、あるいは親戚ベースでこうした業務に従事していた者がおり、バーニーさんの口からこの名称を聞いた時には、懐かしい友人に出会ったような気がしたものである。

バーニーさん自身も、インドのマドラスやジャイプールの工場を廻って、東京のある大手の輸入会社との取引きの仲介に成功している。他の商人も、それぞれ、インドの姻戚ネットワークを利用して、主に東京のインド商品を扱う小売店とインドのメーカーとの仲介を行うことによって、危機に対応しているという。

バーニーさんの場合、コミッショ・エイジェントの仕事からの利益は、店の収益とほぼ同じ位に達しており、それによってかろうじてやりくりしている。ちなみに、沖縄のインド人商人は、全員、月額14-15万円で店舗を借りている。店舗の所有者である沖縄人は、空港通りやパークアヴェニューといった沖縄市の目抜き通りの土地を決して手放そうとはしないし、また、インド人商人の側でも、買おうにも高くて手が出ないというのが実情のようである。

### インド人社会の結束

沖縄市のインド人社会をまとめているのは、バーニーさんが会長をしている「インド人社会協会」である。この協会は、北中城（きたなかぐすく）にある寺院「ヒンドゥーマンデル」を中心に、メンバーの親睦と交流を図っている。

ヒンドゥーマンデルでは、7年前と同様に各種の宗教行事がとり行われている。その中で、この7年間により活発になったのが、サイ・ババの集会である。隔週日曜に開かれるサイ・ババ集会には、日本人15-20名を含めて25-30名が集まる。参考するインド人は、全員第一世代のみ。日本人は、60%が25才位の女性で、残りの40%は30才代の男性が多い。

なお、インド人商人層の間で最も盛大に祝われる新年祭ディワーリーは、ここ沖縄では年毎に縮小しているという。

### 沖縄人社会との関係

バーニーさんは、1989年に設立された「沖縄市国際交流協会」の創設メンバーのひとりである。その他の創設メンバーは、アメリカ人女性が1人、フィリピン人男性が2人、沖縄人が7人だったという。

この協会は、発足以来、年1回の国際フェスティバルを開催する他、親睦のための

ピクニックや、教育のための英語教室・日本語教室、あるいは文化交流のための茶道教室などを開いている。当初50万円だった補助金は、「財団法人沖縄県国際交流財団」からの補助金の50万円が加わって、現在100万円になっている。この補助金に加えて、バザーやさまざまな催しの折りの収益がたまって、現在の基金は500万円になった。

コミッショナ・エイジェントの仕事を始めたバーニーさんは、インド出張が多く、この2年ほどは、こうした交流に積極的に関わることができなかつた。インド人社会は、全般的に国際交流への関心が低い。バーニーさんは、「私が動かないと、他のインド人も動かない」という。

地域における活動にも、あまり協力的ではない。空港通りの商店経営者によって運営されている協会は、インド人が協力的でないことに対して批判的であるという。その背景には、週7日、一日11時間の労働に加えて、インドへの商品の買い付けや、コミッショナ・エイジェントの仕事を夫婦で支えねばならぬインド人商人の状況があると、バーニーさんは言う。

#### 移民社会の女性－沖縄市の事例：Aさんの場合

インタビュー 1997.5.17

午後3時の約束の時間に間に合うよう、レンタカーで那覇のホテルを出た。曇りとはいえ、外気の温度は30度を越えている。国道330号を北上すること16キロ、普天間基地を通り過ぎると沖縄市に入る。国道沿いの椰子の並木やハイビスカスの茂みが、いかにも南国である。やがて国道20号との交差点にでる。電話での指示にしたがって、ここを左折すると、2-3分でめざすAさんの店の前にでた。沖縄市の目抜き通り「空港通り」と「パークアヴェニュー」のうち、「空港通り」は国道20号に面しているのである。

Aさんの店に入ると、20坪ほどの空間狭しと綿製品が並んでいる。すべてインド製である。イヤリングやブレスレットといった装飾品は、レジの脇のガラスケースに、プラス製の水差しや木製の箱などは、奥まったコーナーに陳列されている。

私が、店に入った時、Aさんは接客中だった。客は、那覇からやってきた二人連れの女性客。常連らしく、思い切り値切っている。私は、少し離れて、客が買物を終えるのを待った。

幾何学模様のカラフルなシャツと太めの黒いパンタロン姿のAさんは、背丈が155センチほどの、ふくよかな女性だった。Aさんとは、初対面である。しかし、電話で何回か話をしたことがあり、しかも同性ということもあって、すぐに冗談を言いあう打ち解けた雰囲気になった。接客では日本語を話すが、インタビューがはじまると、英語になった。以下は、土曜日とあって、10分おきくらいに訪れる日本人やアメリカ人客の応対の合間に、Aさんが話してくれた概要である。

#### 〈略歴〉

Aさんは、1945年に、当時英領インドの一部としてイギリス統治下にあった現パキスタンのカラチで生まれた。一族は、シンディ語を話すヒンドゥー教徒である。祖父は、綿や絹の織物を扱う商人として成功し、経済的・社会的に高い地位を築いていた。父は、開業医。貧しい人々からは診察代を取らなかったため、信望が厚かったという。

1947年、Aさんが2才の時、インドとパキスタンが分離独立。ヒンドゥー教徒のAさん一家は、新しく引かれた国境を越え、インド側へと逃れた。祖父母と両親、叔父や叔母、Aさんの他に、産まれたばかりの弟も一緒だった。一族は、グジャラート州のプーナに落ち着いた。父が、開業して一家を支えた。プーナで、さらに弟1人と妹3人が産された。

結婚したのは、1966年。19才の時だった。相手は、マドラスから時々プーナに遊びに来ていた祖母の妹の息子である。遠縁にあたるその息子とは、恋愛結婚。夫の母は、当初、兄弟姉妹が多くて持参金（ダウリー）の出せない家の娘との、この結婚に反対だった。夫は、ハンサムな上に頭も切れる、いくらでも金持ちの娘と結婚できるというのが夫の母親の言い分だった。しかし、夫は、持参金よりAさんとの愛を選んだ。

結婚後、夫の住むマドラスに移り、1967年に長女が、その2年後には長男が産まれた。衣料品関係のセールスをしていた夫は、香港やアメリカ合衆国での経験とネットワークを生かして、1970年に沖縄に移住することを決意。その翌年、Aさんも、ふたりの子供とともに、夫に合流した。1980年には、娘たちを嫁がせてひとりになった夫の母親がマドラスから沖縄にやってきた。インドの伝統的な考え方では、長男が母親の面倒を見ることになっており、昔気質の義母は、娘がマドラスにいても、息子に老後

を託すのが順当だと思っている。以来、Aさんは義母と同居している。結婚に反対した義母であるが、最近では、他の嫁には期待できないことをしてくれる、とすっかりAさんへの評価を変えた。ちなみに、現在義母をインドから引き取ってめんどうをみている沖縄のインド人家族は、3軒だという。

#### 〈新しい生活〉

インドを離れ、沖縄という言葉も文化も異なる土地にやってきて感じたことはいろいろあるが、その中で今でもはっきり覚えているのは、「自由」だった。インド社会では、さまざまな因習が女性をまだ束縛している。親戚付き合いも、友人との付き合いも頻繁で、疲れことが多い。核家族の生活は、子育てに縛られることを除けば、自分の時間が多くとれるし、それだけ解放感があった。

沖縄市に落ち着いてまず着手したことは、在沖のインド人女性の親睦団体を作ることだった。2-3人の友人と語りあって、さっそく「レディース・インディアン・アソシエーション」を設立した。1971年のことである。現在のメンバーは、20名余り。ビンゴパーティーや、時にはボランティア活動をしている。また、沖縄市国際交流協会の企画に協力して、植物園でファッションショーやインド料理のデモンストレーションを行ったこともある。

沖縄市在住のインド人ファミリー間の交流も盛んで、月に1-2回は、ホームパーティーが催されている。しかし、あまり頻繁な時には、疲れることもある。

個人的な生活に関して言えば、沖縄市にやってきた当初は、子育てに専念。2-3年して、育児に手が掛からなくなると店の手伝いを始めた。夫と交替で店番をし、時にはインドに品物を仕入れに行くこともある。基本的にこの生活パターンは、今日まで続いている。空港通りにある現在の店に落ち着くまでに、4回店を替えた。一時は、2つの店を経営していたこともある。

両親は、1986年以来、27年前に渡米してテーラーの仕事を始めた息子とラスベガスで暮らしている。その他、妹がインドのバンガロールとタンザニアのダルエスサラームに在住している。

#### 〈心のやすらぎを求めて〉

3年程前、ラダ・ソアミ (Radha Soami) が説いた信仰<sup>3)</sup>に深く傾倒するようにな

った。ラダ・ソアミは、パンジャブ出身のヒンドゥー教徒で、100年程前に一派を形成し、現在の教祖は5代目にあたる。厳格な菜食主義を奉じ、酒やタバコも禁じ、瞑想の行を通して平和への道を追求している。Aさんは、エホバの証人、サイ・ババ、新約聖書などからさまざまな宗教の心を学ぶ中でラダ・ソアミに出会い、ようやく心の平穏が得られるようになったという。

これほどまでに宗教を通して人の道を求め続けた動機について、Aさんは言葉少なに、人は誰でもささいなことで悩んだり、人を傷つけたりするものだから・・・、と語った。

#### 〈将来の展望〉

このまま沖縄に居続けるか、インドに帰るか、それともアメリカにいる息子に合流するか、将来の展望については、全くわからない。時々、夫と話をすることがあるが、結論には達していない。子供に店を継がせることは、考えたことがないという。休みもなく、朝から晩まで来るか来ないかわからない客を待つほど、非人間的な仕事はない。こんな仕事は、私たちの代で終わりにしたい、とAさんは言う。

#### コメント

沖縄市のインド人社会におけるここ7年間の変化は、次の2点にまとめることができるだろう。

- ① 人的な移動に関しては、第一世代より、第二世代に大きな動きが見られたこと。
- ② 経済的な生き残りをかけて、コミッショナ・エイジェントという分野に進出しあはじめたこと。

①は、沖縄の経済状況に大きく関連している。客層の多様化が進行しているとはいえ、基地の存在は、相変わらず在沖縄インド人商人にとって生命線となっている。一方、沖縄社会における反基地闘争の高まりは、インド人商人の不安を増幅させているにちがいない。こうした将来的な展望が開けない沖縄からの脱出が、今や第二世代の目標となっているとの印象を強く受けた。

沖縄を離れて新たなビジネスを始めるには、第一世代は年を取り過ぎた。教育投資を通じて、第二世代を海外に送り出し、それによって国際的なネットワークを拡大することが、今のかれらに出来る最大の選択肢である。それは、とりもなおさず、第一世代の将来にとっての安全保障の意味を持つ。第二世代にとっても、留学と留学先での結婚は、教育と結婚という沖縄市のインド人社会が抱える人生最大の難関を一挙に解決してくれるチャンスなのである。

②は、インド経済の自由化と密接に関連している。インド政府が、1991年の自由化以降、移民によるインドへの投資を促進するために税制上の優遇措置を採用していることはよく知られているが、移民を通して販路を確保しようとしている民間ベースの動きがあることを、私は今回の調査ではじめて知った。

インド事情に明るい在日インド人商人の仲介は、規制緩和によって増大し始めた日本のベンチャービジネスにとっても、大手の輸入業者にとっても、便利なシステムといえよう。ただし、メーカーと輸入業者が、直接取引きをはじめたらどうなるか。コミッショナ・エイジェントの業務の展望は、必ずしも明るいとは言えまい。

## 注

- 1) 1985年の時点では、47世帯だった。1990年の第一回目の調査時までに、2世帯がアメリカとインドにそれぞれ転出し、45世帯となっていた。
- 2) 夜間の、強盗殺人の犠牲となった。
- 3) ラダ・ソアミの正式名称は、Radha Soami Satsang Beasである。本部は、パンジャブ州アムリツァルのBeasにある。世界中にネットワークを持っており、インド以東のアジア地域では、香港、グアム、インドネシア、日本、マレーシア、フィリピン、シンガポール、スリランカ、台湾、タイの諸都市にセンターや集会所が設置されている。ちなみに、日本では、神戸、横浜、沖縄の三都市に集会所がある。

## おわりにー在日インド人社会の女性たち

法務省が発行している1997年度の『在留外国人統計』によれば、7,478人の在日インド人総数のうち、女性は1,932人である。つまり、男性のほぼ4分の1にすぎない。10年前は、約3分の2だったことを考えると、いかに単身赴任の男性が増加したかがわかる。その大部分は、技術／技能ビザでの滞在者であるが、その他の在留資格の内訳を見ると、教授や法律・会計業務などの専門職が627人、投資・経営などのビジネス関係が432人、留学・就学・研修目的が316人、家族滞在が1,443人、「永住者」が728人、「定住者」が516人、「日本人の配偶者等」が312人、「特別永住者」が5人、「永住者の配偶者等」が32人などとなっている。このうち、長期滞在者と思われるものは、「永住者」や「定住者」などの1,593人である。横浜や神戸、あるいは沖縄在住のインド人が、このうちの大多数を占めると思われる。彼らの中には、印パ分離独立の際にパキスタンからインドに逃れたため、故郷を喪失した人々が多く含まれている。横浜在住のM氏も、神戸のセティ氏の父親や母親のランジットさんも、沖縄のバーニーさんやAさんも、そのようにしてインドに逃れ、そして日本にやってきた。

故郷を失った彼らの拠り所は、宗教を中心とするインド文化と家族であると言ってよいだろう。民族としての誇りも、ヒンドゥー教徒やシク教などの宗教や文化にあり、インドという「国家」にあるわけではない。これが、彼らの「移民」生活を可能にしている。寺院があり、家族がいれば、そこが故郷なのだ。その意味で、宗教や文化を守り、それらを次世代に伝え、家族の生活を維持する役割を担っている女性の存在は、「移民」社会にとっての要である。

また、「移民」としての生活が長期化すれば、民族の宗教や文化も次第に風化する。この傾向は、「移民」第二世代に強い。こうした風化をおしとどめ、民族の価値観を「移民」社会に注入するのが、インド育ちの花嫁たちである。神戸のハルプリートさんは、その典型であろう。彼女は、インタビューのなかで、シク社会の「保守性」に言及した。それが、子供たちの養育にとってプラスに作用している、というのである。わたしは、彼女の話を聞きながら、「宗教」を含め、「共同体」的な価値観を「非西歐的」で「劣ったもの」として捨て去ったばかりか、それにかわるはずの西歐的な個人主義の価値観を身につけることもできず、方向蛇を失ってしまった日本社会の現実に思いを馳せていた。しかし、方向蛇を失った日本社会は、ある意味で「自由」な社

会である。それが、インドの女性にとっては、新鮮に感じられるのだろう。Aさんは、そのような日本（沖縄）社会の「自由」に解放感を感じたひとりである。ところが、こうした「自由」も、彼女を人間としての心の迷いや悩みから解放してはくれなかった。彼女は、心の安定と癒しを「ラダ・ソアミ」という宗教に求めたのである。しかし、彼女の宗教生活は、シク教徒の女性たちとは異なり、いたって個人的な営みであるように思われる。その背景には、求心力を失った沖縄のインド人社会の状況が関係しているのかもしれない。沖縄のインド人社会は、今、活力がない。第二世代の沖縄離れも著しい。Aさん自身も息子に跡を継がせたいとは思っていない。「移民」社会の結束がゆらぎ、それを埋め合わせるようなホスト社会とのパイプもない場合、「移民」の抱える不安や悩みは深まるばかりだからである。

一方、横浜のマヤさん（仮名）は、一家の大黒柱である。三世代同居家族の家事、育児をこなし、さらにファミリー・ビジネスの会計まで引受けている。シェラ・レオネ生まれのため、インドの言語は苦手だが、シンディ文化はしっかり受け継いでいる。それが三世代家族を支えている。そんな印象を強く受けた。

最後に、今回のインタビューに協力して下さった多くの方々に、本誌を借りて、謝意を表したい。また、数年後の再会を心から念じつつ……。



中央 シッタルタ・シン駐日インド大使  
右 アショク・クマール駐大阪—神戸総領事  
左 桑原泰業関西日印文化協会会長



平成9年5月30日 於 住友クラブ  
マハトマ・ガンジー翁の孫 ラジモハン・ガンジーと桑原会長



平成9年11月 パール博士記念碑落成式にて  
パール博士の長男トルサント・パール氏夫妻と桑原会長



藤原真奈美さんの  
バーラナティアムの踊り



土井弘子綜合ヨガ美容スクールの有志によるヨガ演技  
於 神戸まつりにて



平成10年11月 関西日印文化協会創立40周年記念  
「インド舞踊の会」を開催 於 インディアン・ソシアル ソサエティー

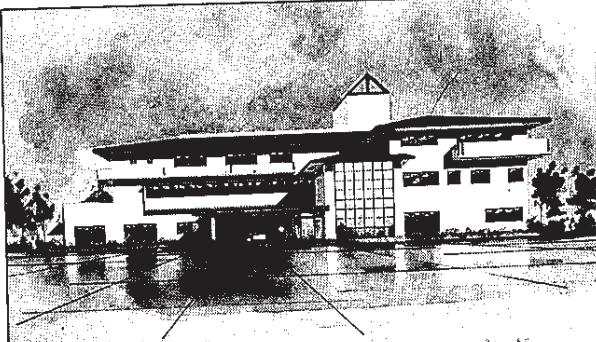
# 神戸掖済会病院

〒650-0004

神戸市中央区中山手通6丁目2番5号

電話神戸 361-4111番(代)

FAX 361-1153番



精神科・神経科・特例許可老人病棟・歯科

- 精神科作業療法
- 老人作業療法
- 訪問看護



明石土山病院

〒674-0074 明石市魚住町清水2744番地の30  
電話 078(942)1021代

院長 太田 正幸

## 緒方耳鼻咽喉科

緒方重郎

〒650-0027 神戸市中央区中町通3丁目1番17号 TEL 341-3711

時代のトレンドを先取する  
高級皮靴専門店



Nakagawaya

靴の中川屋

〒650-0021 神戸市中央区三ノ宮町1丁目10-1  
さんちかカジュアルコート内  
TEL & FAX 078-391-3744

もっと、クスリにできること。

Yamanouchi

山之内製薬株式会社

〒103-8411 東京都中央区日本橋本町2-3-11 ☎03-3244-3000(代)

×

## アルカリ調剤薬局

私たちアリカリ調剤薬局の薬剤師は、患者の皆様の健康づくりと上手な医療の受け方のお手伝いをするために、それぞれの医療分野の専門医を紹介できるシステムを取り組んでおります。患者様ご自身の病気やケガに自分で悩まずに、私たちと一緒に見つめてみませんか。

×

☎ 078-791-8861 代表薬剤師 中島 康伸

地球そして生命のために…



フクダ電子兵庫販売株式会社

本社 神戸市兵庫区大同町1-2-1 ☎(078)521-3601  
尼崎営業所 尼崎市大庄北3-1-26 ☎(06)6433-0151  
姫路営業所 姫路市安田3-100(宝角ビル) ☎(0792)23-0474

×

愛されて32年  
自治体、企業団体等の必携書

## '99県政便覧

好評発売中！

平成11年度版<第32版>  
A5版￥7,500円  
(+消費税・送料実費)

●取り扱い店：県庁地下丸善ほか  
神戸市内の有名書店

### 主な内容

- 県幹部職員住所録（住以上、9級以上写真経歴）
- 教育委員会、各行政委員会、阪神・淡路大震災復興本部、外郭団体職員住所録
- 兵庫県選出国会議員住所録
- 全市・町幹部職員住所録
- 全市議会議員名簿（住所、所属政党）
- 県議会議員名簿（写真、経歴、住所）

～お申し込みは直接本社まで～

株式会社  
The Hyogo  
Journal

兵庫ジャーナル社

〒650-0011  
神戸市中央区下山手通4-6-13  
ファインコート下山手6階  
☎078-333-7560㈹078-333-7563

高齢者のしあわせの輪をひろげて48年  
温かいふれあいがここにあります。

社会福祉法人 痴呆性老人専用施設 神港園しあわせの家 078-743-8291  
**神港園** 特別養護老人ホーム 神港園シルピアホーム 078-965-1407  
養護老人ホーム 神港園 078-965-1407



快適な空間を造る

総合建設業・一級建築事務所

## 兵庫建設株式会社

代表取締役社長 重吉信雄

本社 神戸市灘区灘南通2丁目1番3号 TEL (078) 882-2551 (代)  
支店: 大阪・姫路 営業所: 西宮・明石



## 西部電気建設株式会社

電気設備工事

代表取締役社長 中根與治

本社 〒657-0844 神戸市灘区都通4丁目1番1号  
TEL (078) 882-4051

大阪支店 〒540-0026 大阪市中央区本町1丁目2番1号  
TEL (06) 6942-3029

姫路支店 〒670-0804 姫路市保城字東垣内981番地の1  
TEL (0792) 24-3512

## 日本ネパール文化友好協会

会長 桑原泰業  
事務局長 倉内司郎

〒651-1112 神戸市北区鈴蘭台東町9丁目7番26号  
TEL·FAX (078) 591-0316

Since 1887 KOBE

求められるものは、  
時代とともに

衣・食・住・エレクトロニクス、  
この4つの分野が神栄のフィールドです。  
いつも時代の変化に対応し、高機能専門商社として、  
各種産業に貢献していきました。

高機能専門商社  
SHINYEI 神栄株式会社  
〒650-0034 神戸市中央区京町77番地の1  
Tel (078)392-0800 Fax (078)332-3127

移り変わる

総合建設業



株式会社 大木工務店

代表取締役会長 大木 基 弘

代表取締役社長 大木 克 整

本 社 〒650-0011 神戸市中央区下山手3丁目2番13号 TEL(078)321-1341(代)  
FAX(078)391-0908

大阪支店 〒530-0003 大阪市北区堂島1丁目2番10号 第2堂栄ビル内  
TEL(06)6345-9208  
FAX(06)6345-9209



通信と情報機器の

田中工業株式会社

各種通信機器の販売・工事及びメンテナンス

本 社 〒650-0022 神戸市中央区元町通1丁目1番8号  
TEL 078(391)3341 FAX 078(321)3040

株式会社 ティー・アイ

TOTAL・INFORMATION

(不動産の企画・コンサルタント)

代表取締役 石原庸輔

神戸市須磨区東白川台3-11-16 TEL (078)743-7373  
FAX (078)743-7373



美しい時代へ—東急グループ

# 東急建設株式会社

大阪支店 〒531-8519 大阪市北区豊崎3丁目19番3号  
TEL (06) 6377-1090 (大代表)

—こころを育む環境づくりをめざして—



# 不動建設株式会社

大阪本社 大阪市中央区平野町4丁目2番16号 TEL 06(6201)1121  
神戸支店 神戸市中央区磯辺通2丁目2番3号 TEL 078(261)3212

総合建設業



# 株式会社 岡工務店

取締役社長 岡 繁男

本 社 〒652-0802 神戸市兵庫区水木通4丁目1番1号  
TEL(078) 576-2626番(代表)

大阪支店 〒540-0034 大阪市中央区島町2丁目2番3号-308号  
TEL(06) 6941-3195番



Soken  
Architects  
Office

株式会社創建設計事務所 一級建築士事務所

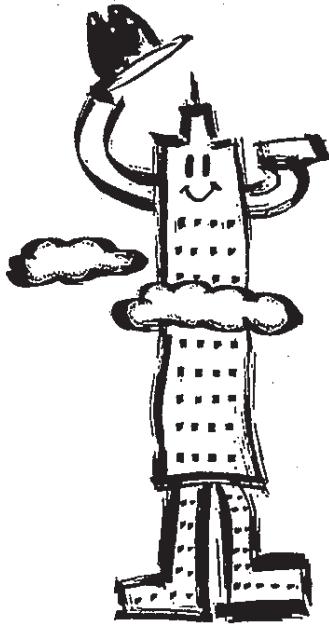
〒650-0011 神戸市中央区下山手通

5-8-21 ソシエタビル3F

Telephone: 078-341-0494㈹

Facsimile : 078-341-2363

# MURAKAMI



## 私たちの住む街

皆様に満足していただくものを提供し人ととの出会いを大切にしています。

## マゴコロを建てる

株式会社 村上工務店

本社 〒652-0815 神戸市兵庫区三川口町2-4-8 TEL (078) 577-2031  
FAX (078) 576-3773  
大阪営業所 〒530-0054 大阪市北区南森町1-1-25 TEL (06) 6364-0510

「壊れない」から、「揺れない」へ。

安全な街づくりに貢献する

## 免震・制震技術

HEART & TECHNOLOGY



# 住友建設株式会社

本社 東京都新宿区荒木町13-4

TEL 03(3353)5111

支店 東京・静岡・大阪・四国・名古屋・九州・北海道・広島・東北・横浜・東関東・北関東・神戸

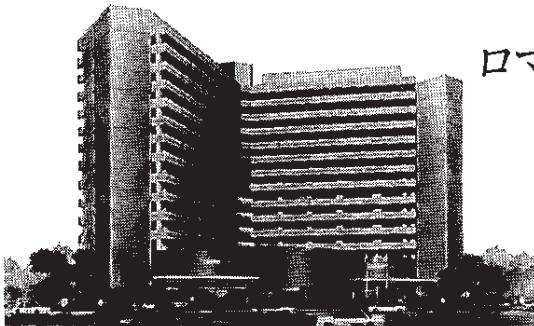
## Zenitaka それは人が集まる場所。



存在感、魅力あるスペース、独創…… いい建物には、そんな表現が当てはまります。でも、人が何故集まってくるのかと言えば、そこにある優しさや信頼感からではないでしょうか。我々は人に優しい空間を目指し、これからも期待に応えて行きます。

錢高組

URL <http://www.zenitaka.co.jp>



ロマンティック神戸のシティホテル。



ホテルパールシティ神戸

〒650-0046 神戸市中央区港島中町7-5-1 FAX078-303-0211

ポートライナーで15分・中埠頭駅より徒歩2分

ご予約・お問い合わせは、☎078-303-0100

## 五十周年フェアー

季節を味に

神戸の心でおもてなし

ご宴会、各種会合は、料亭鈴江で！

各種鍋物・会席料理お気軽にお問い合わせ下さい

☎ 078(351)3331

・1月31日まで15名様以上飲み放題コース  
8000円（税・サービス料込）より

高速花隈駅東口上がる徒歩2分

料亭ホテル鈴江

四季、日本料理の真髄と

ひときわ美しく…

懐石料理

東京

田村

ホテルゴーフル

〒650-0016 神戸市中央区港島中町6丁目1番地（ポートアイランド内神戸商工会議所1階）

☎(078)302-7339

## 中華料理 精 養 軒

新開地店 神戸市兵庫区湊町3丁目2番9号

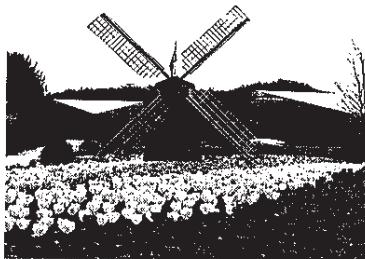
電話神戸 (078) 575-6391・575-0152番

新長田店 神戸市長田区松野通3丁目6番6号

電話神戸 (078) 611-4106・641-6121番

# 季節の花にかこまれて 心も深呼吸！

4,500種の花々が季節ごとに多彩な表情を演出



兵庫県 フラワーセンター

加西市豊倉町飯森1282-1  
TEL 0790-47-1182



MIN-ON  
財団法人 民主音楽協会

- 関西センター 〒543-0015 大阪市天王寺区真田山町4-1 TEL(06)6761-0294  
● 京都サービスセンター 〒602-8148 京都市上京区丸太町通堀川西入ル岡忠ビル2F(二条ハイツ) TEL(075)821-3165  
● 神戸サービスセンター 〒651-0087 神戸市中央区御幸通8-1-6 神戸国際会館16F TEL(078)251-7447

貴女の個性を生かした  
素晴らしいスタイル!!  
着心地の良さ!!

〈婦人服地・お仕立〉

洋装店 ブラボウ

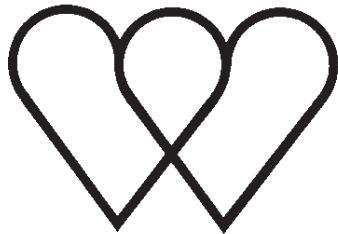
【鈴蘭台店】 神戸市北区鈴蘭台北町1丁目10-2  
(定休日 木曜日) (鈴蘭台プラザ2F)

TEL (078) 592-3909

【学校店】 神戸女子洋裁専門学校隣り  
(定休日 月曜日) TEL (078) 652-0620

(当店に 学校法人 神戸女子洋裁専門学校の)  
(入学案内書あり)

## A HAPPY WEDDING



伝統の和装から、世界一流ブランドの洋装まで、豊富にご用意いたしております。

株式会社  
**つゝや衣裳店**

〒650-0021 神戸市中央区三宮町3丁目1-9 ☎ (078) 321-0360

神戸元町店 ..... ☎ (078) 321-0360

神戸ポートピアホテル衣裳室 ..... ☎ (078) 302-3378

フライダーブティック ピアンカスパーザ ..... ☎ (078) 302-1051

メンズコスチュームンタル シュバリエ ..... ☎ (078) 302-5555

神戸夙月堂「88衣裳室」 ..... ☎ (078) 303-5555

ホテルゴーフルリツツ衣裳室 ..... ☎ (078) 303-5555

楠公会館衣裳室 ..... ☎ (078) 382-0160

新神戸オリエンタルホテル衣裳室 ..... ☎ (078) 262-2908

フライダーブティック アソルティ ..... ☎ (078) 992-3383

西神オリエンタルホテル衣裳室 ..... ☎ (078) 321-0360

兵庫県民会館衣裳室 ..... ☎ (078) 321-0360

インド・ブッダガヤ大塔模写

釈迦塔建立 25メートル



西脇

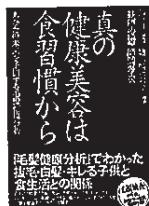
兵庫県唯一の成田山分院

# 成田山

〔成田山法輪寺〕

西脇市小坂町 電話 0795 (22) 3912番

## 眞の健康美容は食習慣から



200頁・定価1,300円(税別)  
自然美システム研究所 代表

萩原俊雄・著

日本健康科学会常任理事  
東海大学教授・医学博士  
師岡孝次・監修

—あなたの未来を予測する毛髪健康分析—

〔毛根検査〕読者サービス特典付き!

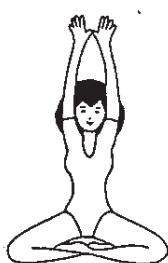
「毛髪健康分析」でわかった抜毛・白髪・キレる  
子どもと食生活の関係や、食生活の欧米化と加工  
食品の氾濫が招いた免疫力の低下、心と体のリズムの  
変調、急増する年齢不相応な髪、肌のトラブルを「自然美健康美容システム」で解消します。

髪と肌のトラブルに詳しくお答えします。  
TEL 03-3351-2411 (10:00~19:00・月曜休)  
詳し案内書を無料でお送りします。

## 土井弘子 総合ヨガ美容スクール

住 所 神戸市中央区北長狭通5-4-16 リンクスタワービル302号

TEL (078) 361-1316



〈沖ヨガ認定道場〉

# 山本ヨガ研究所

主宰 山本正子

〒657-0831 神戸市灘区水道筋6丁目3-3-203  
(阪急王子公園駅下車2分)

TEL 078-861-0215



**全国に、あなたの花が贈れます**  
フジテレビフラワーショップ加盟店



FLORIST  
**Junkaen**

- オープン祝花・ブライダルブーケ・コサージ
- 各種パーティー・結婚式等出張アレンジメント
- 貸植木・造園 ■各流派稽古花 ■ご共花

**(有)順花園**

三宮本店 〒650 神戸市中央区三宮町2-9-13 小倉ビル  
-0021 TEL 078-391-7076 FAX 078-391-1387  
元町本社 〒650 神戸市中央区元町通5丁目1-13  
-0022 TEL 078-341-1464 FAX 078-341-2578  
北野店 〒650 神戸市中央区山本通1丁目7-6  
-0003 TEL 078-231-8741 FAX 078-231-8718

芸能の神  
七福神の美女神  
弁財天を祀る  
神戸の名社

よのみや  
**四宮神社**  
宮司 大山 裕史

よのみや会館  
結婚式披露宴、各種会合にご利用を

鎮座地 神戸市中央区中山手通5丁目2-13 兵庫県庁舎前 電話 神戸 (078) 382-0438番

「葬祭・寝台車・供花」 \*創業 大正10年・遠近昼夜不問\*

<送るこころ 送られるかたち>

株式会社 **オータニ徳風社**

直営式場 オータニ会館

鈴蘭台支店 592-5485

代表取締役社長 大谷晃世  
本社 神戸市長田区松野通1丁目11-12

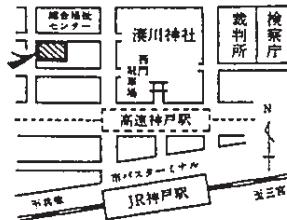
電話 神戸 [078] 621-0089  
FAX [078] 621-1896

■労働省認定一級葬祭ディレクター

# 池上徹法律事務所

〒650-0016 神戸市中央区橘通3丁目3番9号 岡野ビル  
TEL(078)341-6487番 FAX(078)341-0760番

弁護士 池上 徹



1962

極東法務データ研究所

経営士 笠原純英

〒583-8691 大阪府藤井寺郵便局P・B77号気付  
TEL (0729)38-4145 (直通)  
FAX (0729)55-1111 (専用)  
日本経済再生政策提言  
フォーラムメンバー

## 積極的予防調査のすすめ

人間はその生活を営む上で、また企業なら経営政策を遂行する時に、これらの情報監察活動は不可欠であります。そして知る権利行使する上にも積極的な監査活動をお勧めしたいと思います。「医学」にも予防がある様に「監査」にも予防があつてもよいと考えます。あなたのご意見を…

敵を知り 己を知らば 百戦も危うからず

専門分野：裁判、交通、不動産、家事、相続、交渉、規則、司会特許、人事、労務、経営戦略、教育研修、顧問契約  
提携機関：札幌・東京・名古屋・高知・広島・福岡・沖縄

スピーディに、そして美しく。



小西コピーサービス株式会社

■本社 神戸市中央区磯辺通4丁目1-8

I.T.C.ビル301

TEL (078) 252-3388 (代)

FAX (078) 221-3332

代表取締役 小西さつ子

# 書籍宅配便ジュンク・メール

書名・出版社・定価・冊数をご連絡下さい。

宅急便にてお届けします。お届けの際に商品代金と送料(¥400)を配送マンにお渡し下さい。尚一万円以上お買いあげの場合は送料は当社が負担いたします。

神戸市中央区三宮町1丁目6-18

ジュンク堂書店書籍宅配便ジュンクメール係

TEL(078)392-0035 FAX(078)392-1024

【会員募集中】入会金は不要。会員になりますとお支払は便利な自動引落し。さらに、会員に限り送料(¥400)の半額を当社が負担。つまり送料は200円ということになります。そのうえ5千円以上お買いあげの場合は送料全額、当社が負担。つまり送料無料。それに店頭での買い物もサインひとつで出来るジュンクカードの発行や新刊情報を送りしたり、メリットいっぱいのジュンク会員、只今募集中。

# 相馬達雄

(弁護士、大阪経済法科大学教授)

事務所：〒530-0047 大阪市北区西天満4の1の1 北ビル1号館4F  
電話 06-6365-0601～3

自宅：〒662-0813 兵庫県西宮市上甲東園1の16の20  
電話 0798-51-3934

## 園田学園 女子大学 短期大学部

### <国際文化学部> 6つの専攻新設

■文化学科  
日本の文学と芸能専攻  
日本の歴史と民俗専攻  
比較生活文化専攻

■言語コミュニケーション学科  
日本語専攻  
英語専攻  
情報コミュニケーション専攻

### <短期大学部>

■生活文化学科  
生活文化専攻  
食物栄養専攻  
国際食文化専攻

■幼児教育学科  
■国際文化学科  
日本文化専攻  
英語文化専攻

理事長・学長 一谷 宣宏 〒661-8520 尼崎市南塚口町7-29-1 TEL.大阪(06)6429-1201(代)

# タゴール著作集 全12巻

人間のこころを詩う詩聖タゴール  
一本邦初の本格的著作集完結!  
①定価5400円②～⑩各定価5301円⑪定価8262円(税込)

- |                          |                                |                                |                               |
|--------------------------|--------------------------------|--------------------------------|-------------------------------|
| ①詩集 I<br>解説=大岡信 解題=森本達雄  | ④中・短篇小説集 I<br>解説=小田実 解題=我妻和男   | ⑦哲学・思想論集<br>解説=松山俊太郎 解題=森本達雄   | ⑩自伝・回想・旅行記<br>解説=鶴見俊輔 解題=森本達雄 |
| ②詩集 II<br>解説=山室静 解題=森本達雄 | ⑤中・短篇小説集 II<br>解説=石上玄一郎 解題=奈良毅 | ⑧人生論・社会論集<br>解説=市井三郎 解題=姥原徳夫   | ⑪日記・書簡集<br>解説=杉浦明平 解題=我妻和男    |
| ③長篇小説<br>解説=野間宏 解題=我妻和男  | ⑥戯曲集<br>解説=木下順二 解題=森本達雄        | ⑨文学・芸術・教育論集<br>解説=福田陸太郎 解題=奈良毅 | ⑫「別巻」タゴール研究                   |

〒160-0008 東京都新宿区三栄町9-3 ☎ 03(5269)7141代/FAX 03(5269)7146/振替・東京5-117823

第三文明社

☆大阪市内の 貸ビル各種  
空室 御座居ます。

日進ビルディング  
日進第3ビルディング  
曾根崎東ビルディング

日進産業株式会社

問い合わせ 〒530-0051  
大阪市北区太融寺町8番8号  
TEL (06) 6312-2231 FAX (06) 6312-2235

空調ダクト・厨房ダクトが甦る‘クリーンな環境づくり’

DUCT BUSHING CLEANING 工法 特許 第2601508号



株式会社第一東亜

大阪市淀川区西三国3丁目8番9号

TEL (06) 6394-7887

FAX (06) 6396-4525

株式会社 ユーワハウジング

財産保障 有効土地利用 リスクマネージメント

代表取締役 高沢 俊男

神戸市中央区海岸通4丁目3-18 平和ビル TEL 078-351-2017 FAX 078-351-2914



研修・講演・イベントの企画  
損害保険の代理業務

株式会社 エス・ケイ・グローバル

〒550-0013 大阪市西区新町1-8-1  
TEL 06-4390-0318 (代)  
FAX 06-4390-0328

東 ヒガシマル

自然の色と味の 東 うすくち醤油です

\*うすくち醤油発祥の地>兵庫県龍野市 ヒガシマル醤油株式会社

会席、活魚料理  
鍋物一式、寿司  
幕之内弁当

御食事処 ふる里

細見和斎

神戸市中央区下山手通7丁目11の4

電話(078)351-5008番

☆仕出し承ります☆

— 和 の 道 場 —

聖徳太子会館

館長 森 修爾

大阪市天王寺区下寺町2-2-21

TEL 06-6771-8657



平和タクシー株式会社

代表取締役社長 稲井信男

神戸市兵庫区三川口町2丁目2番1

電話 (078) 576-8686(代)

FAX (078) 578-0988

# IMPERIAL TRADING Co., LTD.

EXPORTERS & IMPORTERS

P. O. Box HIGASHI 301  
Osaka, Japan

CABLE ADDRESS  
"IKONKAR"  
TELEX  
J 64722 IKONKAR

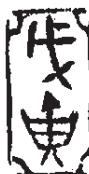
TEL. (06) 6266-1176  
(06) 6264-5738/9  
FAX. (06) 6266-8644

WITH COMPLIMENTS  
OF  
UNIVERSAL PEARL CORPORATION  
(Mr. L. D. JHAVERI)

2-8 KITANO-CHO, 3-CHOME, EVEREST, CHUO-KU  
KOBE, JAPAN  
T N. 231-2365



GARDEN HOUSE 1F 2-2-25, Ikuta-cho, Chuo-ku KOBE, JAPAN 651-0092  
TEL:078-222-3880 FAX:078-222-3885  
E-mail:jupiter@sanynet.or.jp



祝40周年  
歴史と眞愛  
真珠錦商会

関西書道院 理事  
(師匠 川谷尚亭、西田黄亭)

西浦



新 神戸市西区今寺21-7  
TEL (078) 974-4350



# ashoka

INDIAN RESTAURANT

Open Daily Except Second Tuesday

**OSAKA**

Osaka Maru-Biru  
Tel.(06)6346-0333  
Closed on 3rd WED.

**KYOTO**

Kikusui Biru  
Tel.(075)241-1318  
Closed on 3rd WED.

**FUKUOKA**

Solaria Plaza Biru  
Tel.(092)733-7609  
Closed on 2nd TUE.

Take Away Shops :

Tskashimaya Dept.Store B1,  
Namba, Osaka.

Hanshin Dept.Store B1,  
Umeda, Osaka.

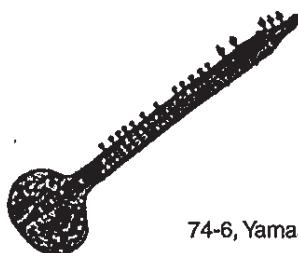


# INDIAN RESTAURANT **Gaylord**

BACCHUS BUILDING, 7F  
1-26-1, NAKAYAMATE-DORI  
CHUO-KU, KOBE 650-0004, JAPAN  
Website: [www.gaylord-restuarant.com](http://www.gaylord-restuarant.com)

TEL. (078)251-4359  
(078)251-7156  
FAX. (078)222-2040

Lunch Time A.M.11:30~P.M.2:30  
Dinner Time P.M. 5:30~P.M.9:30  
Open Daily



# Indian Restaurant **SITAR**

YOKOHAMA

Lokumal Bldg., B1  
74-6, Yamashita-cho, Naka-ku, Yokohama 231-0023  
Tel. (045)641-1496

●WEEK DAYS

11:30~14:30  
17:00~21:30

●SUNDAYS & NATL.HOL.  
11:30~21:00



新印度料理  
カマール  
KOBE MOTOYAMA

# **KAMAL**

INDIAN BISTRO

Silk Road Garden

1-3

Motoyama-Kitamachi  
Higashi-nada-ku, Kobe 658-0003

Tel:(078)413-8702

Monday Closad

11a.m. ~ 3p.m., 5p.m. ~ 9:30p.m.  
Sun. / Hol.  
11a.m. ~ 9:30p.m.

Indian Restaurant

# **Indeel KAMAL**



**TENNOJI-MIO**

10-39, Hidein-cho, Tennoji-ku, Osaka 543-0055  
Tennoji Terminal Bldg. 11F  
Tel.(06)6770-1230  
1ST & 3RD TUESDAY-CLOSED

# 洗練されたクリアな味・辛口。

何杯飲んでも飲み飽きない。  
スーパードライならではのうまさ。それが、  
「洗練されたクリアな味・辛口」です。



## アサヒスーパードライ

ビールは20歳になってから。あきかんはリサイクル  
○自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。

○ホームページアドレス  
<http://www.asahibeer.co.jp>

アサヒビール株式会社



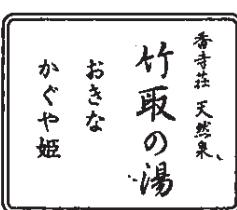
欧風料理 昭和6年創業  
ハナワ グリル

TEL. 078-332-0878 FAX. 078-322-1034  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通4-3-13 私学会館1F

## 香寺荘『竹取の湯』

…竹林に囲まれた天然泉…

露天風呂  
サウナ風呂  
うたせ湯  
気泡湯  
ジェット風呂  
寝湯  
蒸

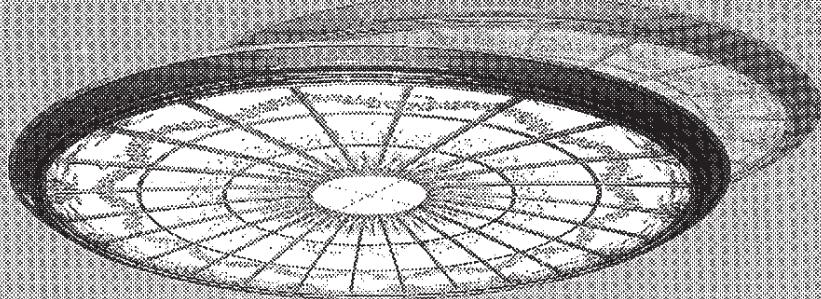


ご宿泊・ご休憩・ご宴会

香寺町休養センター

### 香寺荘

兵庫県神崎郡香寺町恒暦1470  
TEL 0792-32-7788 FAX 0792-32-1032



## ここから始まる神戸 ショッピングエントランスさんちか。

ショッピング、クリメ、そしてホットな暮らしの情報にあふれた街。

毎日を楽しく創造する街「さんちか」。

135店の個性が、あなたの明日を新鮮にします。

さんちかで使える。世界で使える。

### さんちかメンバーズカード

ショッピングの割引、キャッシュバック、特別イベントのご招待など、会員特典  
がいっぱいの「さんちかメンバーズカード」。世界で使用できるJCB、VISA、  
UC／マスターカードの中からお選びいただけます。

心を伝えて、カタチは先様のセレクトフリー。

### さんちかギフト券

贈った人が自由に選べるから、ギフト券は決してあなたの心が伝わり、忘れられず。  
食事に、ショッピングに、さんちか全店で使えるギフト券。ご予算に合わせ、500  
円単位でご利用いただけます。(お求めは、さんちかインフォメーションで)

**santica**  
The New Heart of Kobe 神戸・三宮さんちか

さんちか名店会

神戸市中央区三宮町1-10-1 ☎078(391)3965 ●営業時間/AM10:00～PM8:00(飲食店はPM9:00オーダーストップ) ●定休日/毎月第3水曜日



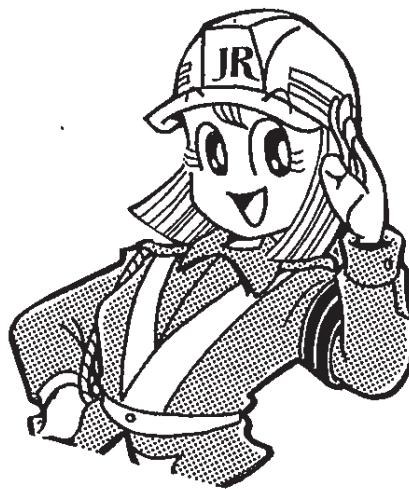
道路規制専門  
ジャパンロード警備保障株式会社

大阪府公安委員会認定第1554号

社団法人 全国警備業協会会員  
社団法人 大阪府警備業協会会員  
社団法人 兵庫県警備業協会会員  
社団法人 奈良県警備業協会会員  
大阪府警備連盟会員  
大阪府高速道路交通安全協議会会員  
兵庫県高速道路交通安全協議会会員

代表取締役  
社長

安 修 二



テレビCMでおなじみのジャパンロード警備が高速・一般道路警備員大募集

本 社 ☎543-0023 大阪市天王寺区味原町14-3  
TEL(06)6767-8686 FAX(06)6767-1010

兵庫営業所 ☎662-0857 西宮市中前田町3-16  
TEL(0798)32-8800 FAX(0798)32-8801

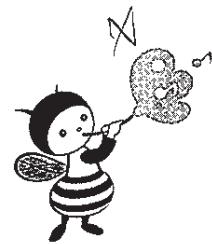
奈良営業所 ☎632-0251 奈良県山辺郡都祁村字針カリヤ591  
TEL(0743)82-2777 FAX(0743)82-2776

大橋渡れば、花の島。

# 淡路花博 ジャパンフローラ2000



前売券  
好評発売中!



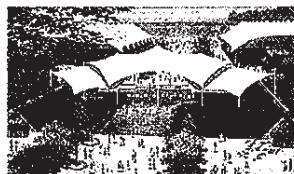
会期 2000年3月18日(土)~9月17日(日) 184日間

9:30~18:00 夏期[7月1日(土)~9月3日(日)]は、9:30~21:30

会場 兵庫県淡路島(淡路町・東浦町)

主会場は、国営明石海峡公園(淡路地区)、  
淡路夢舞台など約96ha。

テーマ 人と自然のコミュニケーション



メインゲート

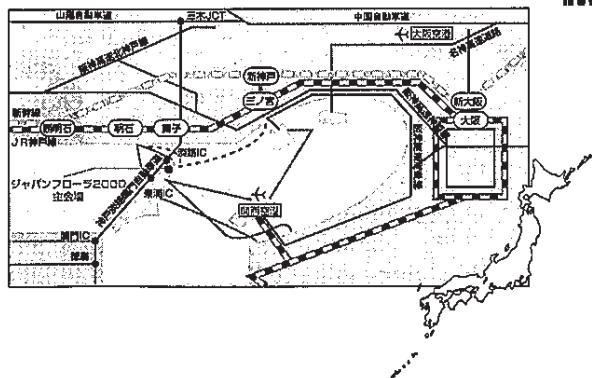
## 国際庭園

海外からの出展により、世界各国の伝統的な庭園や新しい庭園が集まります。



「ジャパンフローラ2000」は、国際園芸家協会(AIPH)が承認する花と緑の国際博覧会です。  
特別協力/農林水産省、建設省 後援/外務省、厚生省、通商産業省、運輸省、郵政省、自治省、環境庁、国土庁など

## 会場位置図



会場へは、神戸淡路鳴門自動車道・淡路インターから車で南へ5分。  
東浦インターから北へ10分。

最寄りの駅からは、シャトルバスが運行される予定です。

国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000日本委員会」

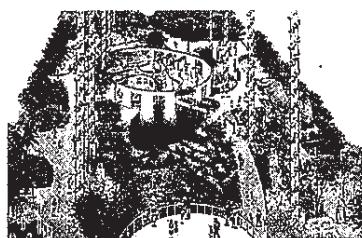
財団法人 夢の架け橋記念事業協会 ☎ 078(393)2960

ホームページ <http://web.pref.hyogo.jp/jpnflora/>

E-mail [jpnflora@po.hyogo-linc.ne.jp](mailto:jpnflora@po.hyogo-linc.ne.jp)

世界各国が競う花と緑の展示、映像パビリオン、  
国際庭園や虹の花壇、そして、楽しい遊園地、  
華やかなステージなど、見どころはいっぱい  
です。また、グレメ、ショッピングも満喫できます。  
感動と夢あふれる博覧会へ、ぜひお越しくだ  
さい。

## 花の館



海外参加のフラワーショーなど、季節の花の展示会を次々  
に開催します。



## 緑と都市(まち)の館

遠い昔から現代に至る人と緑の関わりを映像と展示で紹介します。

## 淡路・虹の花壇

四季の花々で鮮やかな虹をデザインした  
大花壇です。



## 前売券にはビッグな3つの特典が付いています!

区分	第1期前売料金(99年9月30日まで) ( )内は当日料金	
	普通入場券	フローラバス (全期間通用入場券)
大人	2,300円(2,900円)	6,300円(7,900円)
シルバー	1,600円(2,000円)	4,300円(5,400円)
高校生	1,200円(1,500円)	3,300円(4,100円)
小中学生	600円(800円)	1,700円(2,200円)
幼児	300円(400円)	800円(1,100円)

前売券は、旅行代理店、JRみどりの窓口およびプレイガイド  
などでお求めください。

特典1 第1期前売券を買うと、豪華賞品が当たる抽選のチャンスが2回!

特典2 明石海峡大橋または大鳴門橋の往復運行割引証が付いてくる!!  
(一部取り扱っていない販売窓口があります。)

特典3 淡路島内の主な人気観光施設の優待割引が受けられる!!!

お問い合わせ先 ジャパンフローラ2000入場券販売管理本部  
☎ 078(366)1490

# Come, India is calling

Explore  
**India**  
in  
Millennium Year



**AIR-INDIA**

Osaka Reservation: 06-6264-1781 Nagoya: 052-583-0747  
Sales : 06-6264-5911 Kansai Airport: 0724-56-5211

# 関西日印文化協会 役員名簿

1999年7月現在

## ■名誉顧問■

シッダルタ・シン	駐日インド大使
アショク・クマール	大阪—神戸インド総領事
櫻内 義雄	元衆議院議長、元外務大臣
山田 勇民	大阪府知事
貝原 俊也	兵庫県知事
柿本 善也	奈良県知事
笹山村 駿也	神戸市長
磯牧 文彦	大阪市長
	神戸商工会議所会頭

## ■顧問■

岡本 道人	京都大学名誉教授
尾雅人	京都大学名誉教授、日本学士院会員
中村元	東京大学名誉教授、東方学院院長
小林庄一郎	大阪国際交流センター理事長
	関西電力株式会社会長
矢木暢信	元京都大学教授
木村重信	大阪大学名誉教授
	兵庫県立近代美術館館長
神谷不二郎	慶應大学教授
野田英二郎	元駐印大使
加瀬英明	外交評論家
新野幸次郎	神戸大学名誉教授・元学長
	神戸都市問題研究所所長
上田繁潔	前奈良県知事、関西大学理事長
上田正昭	大阪女子大学学長、
	京都大学名誉教授
梅原猛	国際日本文化研究センター所長
奥村輝之	さくら銀行常任顧問
横尾忠則	画家

## ■会長■

桑原泰業	神戸ユネスコ協会名誉会長
	日本バラ文化協会会长
	日本ネパール文化友好協会会长

## ■理事■

網干善教	関西大学名誉教授
秋田博正	正興産業株式会社社長
ヴァサンタマラ	印度古典舞踏研究所主宰
宇都宮浩	兵庫県総務部次長
岡澤薰	西脇市岡之山美術館館長
大谷紀美子	元相愛女子大学教授
黒澤一晃	神戸松蔭女子学院大学教授、前学長
笠井慈朗	京都新聞社社友
清倉明徳	播州成田山（法輪寺）住職
相馬あけみ	日清産業株式会社代表取締役
津田達雄	弁護士、大阪経済法科大学教授
土田信基	長田神社名誉宮司、神社本庁理事
井芳子	神戸市婦人団体協議会名誉会長

## ■理事■

磐勝範	南法華寺（壺坂寺）住職
常内二郎	ポートピアホテル相談役
永木篤雄	元兵庫県国際交流協議会専務理事
木原竜虎	九州産業大学教授
萩原良祐	(株)自然美システム代表取締役
比藤誠之祐	(株)オーロラ社長
溝田富修	元サンテレビ常勤監査役
森達夫	大阪外国语大学教授
森惠照	聖徳太子会理事長
森泰信	名城大学教授
山田廣信	大阪大学名誉教授
山田宏夫	種智院大学教授
山田宏徹	神戸デザイナー協会副理事長
山本徳士	宮城学院女子大学教授
山本智津子	国際日本文化研究センター教授
山池富永	弁護士
山富智津子	宮城学院女子大学教授

## ■監事■

松岡薰	税理士、松岡薰税理事務所所長
松岡靖雄	税理士

## ■評議員■

浅野正運	浄福寺住職
井上紀裕	神戸仏教連合会顧問、前大覚寺門跡
大山陽太郎	四宮神社宮司
小澤門子	インド舞踊家
加賀良喜	妙法寺住職
金澤喜代春	神戸女子薬科大学理事長
河井良治	京菓子・若狭屋久茂当主
木澤良三	(株)奥野工務店社長
藤井邦美	大阪商業大学教授
井上直暁	北野天満宮宮司
澤井曉	インド舞踊家
木村恵省	熊内八幡宮宮司
井橋史子	追手門大学名誉教授
中河寅仁	神戸大学名誉教授
賀子一	シンエー・フーズ(株)会長
井上成夫	京大人文学研究所助教授
佐野邦子	西徳寺住職
佐野邦子	土井弘子ヨガ美容スクール主宰
佐野邦子	阿弥陀寺住職
佐野邦子	万京社長
柳田邦子	アショカ・ツアーカー長
柳田邦子	甲南大学名誉教授
柳田邦子	岡山商科大学教授
柳田邦子	インド舞踊家
柳田邦子	甲南大学名誉教授
柳田邦子	岡山商科大学教授
柳田邦子	(株)ティー・アイ代表取締役
柳田邦子	内外鉱油社長

## LIST OF LIFE MEMBERS

1. MR. P. D. CHOKSI
2. MR. L. D. JHAVERI
3. MR. N. S. WASU
4. MR. M. S. WASU
5. MR. B. S. SETHI
6. MR. N. S. SETHI
7. MR. F. C. KARANI
8. MR. P. S. JAVERI
9. MR. S. M. ZAVERI
10. MR. H. SHAMDASANI
11. MR. G. RAMANLAL
12. MR. S. R. CHODHRY
13. MR. R. N. HEMNANT
14. MR. H. R. KANJI
15. MR. DASU BHOIWMIK

日印文化  
創立40周年記念特集号  
平成11年8月発行

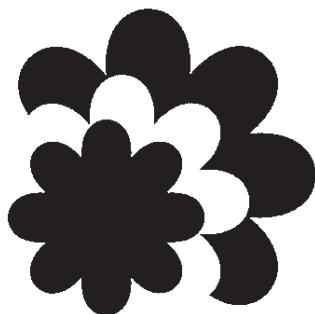
編集発行人 桑原泰業

発行所 関西日印文化協会(TEL・FAX 078-591-5633)

〒651-1112 神戸市北区鈴蘭台東町9丁目7番26号

印刷所 共栄印刷株式会社(TEL 078-341-0316)

〒650-0013 神戸市中央区花隈町22番6号



あなたの街の  
あなたのみなど。

 みなと銀行

オフィスメンテから住宅の増改築まであらゆる『快適』をサポートします。



神戸ビル管理株式会社

本 社 / 〒650 神戸市中央区京町77番地の1 TEL 078-391-6550  
-0034 ( 神栄ビル 3F ) FAX 078-391-8016  
東京支社 / 〒102 東京都千代田区九段北1丁目14-21 TEL 03-5275-2761  
-0073 ( 九段アイレックスビル2F ) FAX 03-2575-2764

## 初めての 完全補償型自動車保険

安心、ひろげます。  
**東京海上**

東京海上火災保険株式会社 近畿第二本部  
神戸市中央区海岸通1-1-7第二神港ビル 〒651-0175 TEL(078)333-7111



# CHOICE! 日本火災!!!

選ぶなら、日本火災の代理店ですね。

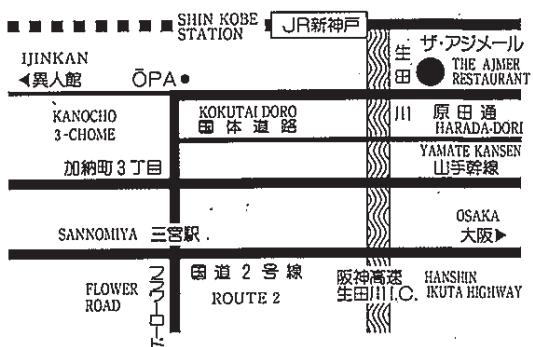


# LAVISH TRADITIONAL INDIAN CUISINE



wine and dine at ....  
THE  
**AJMER**  
INDIAN RESTAURANT

TEL: (078) 231-8092



## ADDRESS

神戸市中央区熊内町4丁目8-4 カナヤラルビル1~2階  
Kanayalal bldg. 1/2-floor, 8-4, 4-chome, Kumochi-cho,  
Chuo-ku, Kobe

ランチタイム……11:30A.M.~2:30P.M.  
ディナータイム…5:00P.M.~9:30P.M.  
(定休日 木曜日)